帝國實業讀本

巻八

4C
810
昭8

42536
教科書文庫
4
810
44-1933
20000
71508

資料室

文部省檢定濟
昭和八年八月二日 實業學校國語科用

帝國實業讀本

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學士 長谷川福平 訂補

東京
合資會社 冨山房發兌

広島大学
教
71508
図書

4C
810
昭8

神苑春雨

山口蓬春筆

帝國實業讀本　巻八

目次

一　百蟲譜……横井也有……一
二　十六夜日記……阿佛尼……五
三　奈良懷古……中村孝也……九
四　家居のさま……吉田兼好……一八
五　落葉を焚く歌(詩)……河井醉茗……二六
六　生活の心境……豐島與志雄……二八
七　熊野落その一……(太平記)……三三
八　熊野落その二……(太平記)……三七
九　芭蕉翁の臨終……(花屋日記)……四一

時雨月(自修文)……上司小劔…四八
一〇 枯野(古俳句)……五二
一一 俳句の修辭……沼波瓊音…五三
一二 光頼卿の參内……(平治物語)…六二
一三 長柄堤の訣別……坪内逍遙…七〇
一四 歳暮……鳥野幸次…八〇
青年よ偉大なれ(自修文)……永田秀次郎…八五
一五 小野の御室……(伊勢物語)…九二
一六 美術に現れた日本國民性その一……藤懸靜也…九四
一七 美術に現れた日本國民性その二……藤懸靜也…一〇〇
一八 揚雲雀(古俳句)……一〇七
一九 安宅(謠曲)その一……一〇八
二〇 安宅(謠曲)その二……一一三

二一 汝の一日を全うせよ……加藤咄堂…一二〇
平凡の道德(自修文)……德富蘇峯…一二六
二二 方丈記その一……鴨長明…一三一
一 うたかた……一三一
二 安元の大火……一三二
三 治承の辻風……一三三
四 都うつり……一三四
五 養和の飢饉……一三七
二三 方丈記その二……鴨長明…一三八
六 わづらひ……一三八
七 閑居……一四一
二四 情操日本と神道……深作安文…一四六

帝國實業讀本 卷八

一 百蟲譜

横井也有(一)

蝶の花に飛交ひたる、優しき物の限りなるべし。それも、啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ、猶めでたけれ。さてこそ莊周(二)が夢も、この物には託しけめ。

蛙は古今の序(三)に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風靜まりて、遠く聞ゆるはよし。古池(四)に飛んで翁の目覺したれば、この物の事、更にも誇り難し。

蟬は唯五月晴に聞初めたる程がよきなり。稍日盛に啼きさかる比は、人の汗絞る心地す。されば、初蝶とも、初蛙とも言ふ事を聞かず、この物ばかり初蟬と言はるゝこそ、大きなる手がらなれ。(五)やがて死

(一) 江戸時代の俳人。俳文に勝れてゐた。名は時敏、半掃庵と號した。名古屋の人。天明三年(二四四三年)歿、年八十二。

(二) 莊子に「昔莊周夢に胡蝶となる。」とある。

(三) 古今集序「花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの何れか歌を詠まざりける」云々。

(四) 「古池やかはづとびこむ水の音」(芭蕉)

(五) 「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」(芭蕉)

(一)晉の車胤。

ぬ氣色は見えず」と、この物の上は、翁の一句に盡きたりと言ふべし。

螢はたぐふべき物もなく「景物の最上なるべし。水に飛交ひ、草にすだく。五月の闇は唯この物の爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに(一)貧の學者にとられて油火の代にせられたるは、この物の本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

ひぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。

莊周（橋本雅邦筆）

つく〴〵ぼふしといふ蟬は、つくしこひしとも言ふなり。「筑紫の人の旅に死して、この物になりたり。」と世の諺に言へりけり。哀は蜀

(一)原は駿河國(靜岡縣)駿東郡。吉原は同富士郡。共にもと東海道五十三次の一。

むくつけし

魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲はたが爲に身を焦すにか。

蜉蝣ははかなきためしに引かれ、たで食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、こがね蟲は卑し。

蝸牛は唯水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蟹の歩みに譬ふべき物こそなけれ。唯(一)原、吉原を駕籠に乘りて富士を詠め行く人には似たり。

機織、鈴蟲、くつわ蟲は、その音の似たるをもて名に呼べり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衞ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の

類なるべし。

きりぎりすの(一)つゞりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、(二)藻にすむ蟲はわれからと唯身の上を歎くらんを、蓑蟲のちゝよと呼ぶは、いと優しげなり。されど、父のみこひて、などかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限りながら、流石卯月の比端居珍しき夕、始めてほのかに聞きたらん、または長月の比力なく殘りたるは、寂しき方もあり。蚊屋つりたる家の樣、蚊遣たく里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの(三)七賢の夜話には、いかに團扇の暇なかりけん。

—鶉衣—

竹林の七賢（狩野元信筆）

(一)「秋風に綻びぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりすなく」（古今集、在原棟梁）

(二)「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそ鳴かめ世をば怨みじ」（古今集、藤原直子）

(三)晉の嵇康の交つた奇士阮籍、山濤、向秀、劉伶、阮咸、王戎。いはゆる竹林の七賢である。

二　十六夜日記

阿(一)佛尼

栗田口(二)といふ所より車はかへしつ。程なく逢坂の關越ゆる程に、

さだめなき命は知らぬ旅なれど
またあふ坂とたのめてぞゆく

野路(三)といふ所は、こしかたゆくさき人も見えず。日は暮れかゝりて、いともの悲しと思ふに、時雨さへうちそゝぐ。

うちしぐれふる里おもふ袖ぬれて
ゆくさきとほき野路のしの原

こよひは鏡(四)といふ所に著くべしと定めつれど、暮果てて行著かず、守山(五)といふ所にとゞまりぬ。此所にも時雨なほ慕ひ來にけり。

いとゞなほ袖ぬらせとや宿りけん
まなく時雨のもる山にしも

(一)鎌倉時代の女流文學者。藤原爲家の妻、爲相の母。弘安六年（一九四三年）歿、七十六。十六夜日記、夜の鶴等の著がある。

(二)今京都市左京區。東國街道から京都に入る入口にあたる。

(三)今滋賀縣栗太郡老上村。

(四)同縣蒲生郡鏡山村の北にあつた古驛。

(五)同縣野洲郡守山町。野洲川の西岸にある。

十六夜日記　岩田正已筆

(一)建治三年（一二七七年）十月。
(二)野洲郡。
(三)同縣坂田郡。
(四)坂田郡。米原の東北五キロメートル。居寤の清水は古來名高い。
けぢめ
(五)岐阜縣不破郡。「みの國せきの藤川たえずして君に仕へんよろづ代までに」(古今集、大歌所御歌)

今日は十六日[一]の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。未だ月の光はかすかに殘りたる曙に、守山を出でて行く。やす川[二]渡る程、先立ちて行く旅人の、駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人はみなもろともに朝立ちて
こまうちわたす野洲の川霧

十七日の夜は、小野[三]のしゆくといふ所にとゞまる。月出でて、山の峰に立ちつゞきたる松の木のま、けぢめ見えていと面白し。此所は夜深き霧のまよひにたどり出でつ。さめがゐ[四]といふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、かちびとはなほ立寄りて汲むめり。

むすぶ手に濁る心をすゝぎなば
うき世の夢やさめが井の水

とぞ覺ゆる。

十八日、美濃國關[五]の藤川渡る程に、先づ思ひつゞけける、

（一）不破郡關ヶ原町松尾の大木戸坂にあつた關所。天武天皇の時始めて置かれた。「人住まぬ不破の關屋の板庇あれにし後はただ秋の風」（新古今集、藤原良經）

心より外に
（二）同縣安八郡北杭瀬村。

わが子ども君に仕へん爲ならで
　わたらましやは關のふぢ川

（一）不破の關屋の板庇は今も變らざりけり。

阿佛尼（狩野豪信筆）

ひま多き不破の
　關屋はこの程の
　　しぐれも月も
　　　いかにもるらん

關よりかき暮しつる雨、時雨に過ぎてふり暮せば、道もいと惡しくて、心より外に（二）笠縫のうまやといふ所に、暮果てねどとどまる。

たび人はみのうち拂ふゆふ暮の
　雨にやどかるかさぬひの里

二十一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山遠きはら野を分けゆく。晝つ方になりて、紅葉いと多き山に向ひて行く。風につれなき所々、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、あをぢの錦を見る心地す。人に問へば宮路山[一]といふ。

しぐれけり染むるちしほのはてはまた
もみぢの錦いろかへるまで

この山まではむかし見し心地するに、頃さへ變らねば、

待ちけりなむかしも越えし宮路山
おなじ時雨のめぐりあふ世を

山の裾野に竹のある所に、茅屋のひとつ見ゆる、いかにして何のたよりにかくて住むらんと見ゆ。

ぬしやたれ山の裾野に宿しめて
あたり寂しき竹のひとむら

(一)三河國（愛知縣）寶飯郡。海拔三六二メートル。紅葉の勝地。

日は入果てて、なほ物のあやめもわかぬ程に、わたうど[一]とかやいふ所にとゞまりぬ。

三　奈良懷古　〇

中村孝也[二]

[三]奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふ句がある。これを口ずさめば、佛教が盛んに行はれた有樣が想ひやられるであらう。

[四]青丹よし奈良の都は咲く花の
にほふがごとく今さかりなり

といふ歌がある。これは平城京の全盛を讚美したものである。

[五]いにしへの奈良の都の八重櫻
けふ九重に匂ひぬるかな

(一)度津。寶飯郡。
(二)歴史家、文學博士。史料編纂官兼東京帝國大學助教授。明治十八年群馬縣に生れた。しら菊、源九郎義經、英後傳等の著がある。
(三)芭蕉の句。
(四)萬葉集卷三に見える小野老の作。
(五)詞花集卷一に見える伊勢大輔の作。

といふ歌もある。これは平安朝になつてから、奈良朝の盛時を追懐した歌である。

多くの人々が奈良朝を懐かしみ、奈良の舊都を好んでゐる。(一)嫩草山の春の曙、暖な風がそよ〳〵と鹿の群の夢をなぶる所、(二)猿澤池の秋の夕、一輪の明月が(三)五重塔の頂に懸つて、衣掛柳の寂しげな風情、或はまた緑樹の間に隱見する(四)春日神社の朱樓、宏壯眼を驚かす大佛殿の結構、(五)三月堂の裡に祕められてある佛體の幽玄清高限りなき御姿、遠くは西の京一帶の荒漠たる光景、萬葉集に歌はれてゐる大和の山川草木は、一つとして詩興、畫趣をそゝらぬ物はない。

猿澤池

(一)奈良市の東北にある丘陵。緩やかな傾斜をなし、滿山美しい芝草で覆はれてゐる。三笠山とも呼ぶ。
(二)奈良市三條通の東端なる興福寺の南の崖の下にある。
(三)興福寺の五重塔。
(四)奈良市春日野町にある。官幣大社。祭神は武甕槌命外三神。藤原不比等の勸請で、藤原氏の氏神であつた。
(五)東大寺の域内にある。一名法華堂。奈良に於ける最古の建築。天平五年（一三九三年）僧良辨の開基。

○

その昔(一)元明天皇が平城京を經始された時は、規模の雄大な事、誠に眼を驚かすばかりであつた。それは今の奈良よりも西、(二)郡山よりも北に亙る廣い地域を占め、唐の長安の都制に倣つて、朱雀大路に依つて左京と右京とに分たれ、各京は九條に、各條は四坊より成り、東西南北の街路井然として紊れないものであつた。それより元正、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁の六代を經て、(三)桓武天皇の初に至るまで七十餘年の間、奈良の都は誠に咲く花の匂ふが如くに榮えて、文學にも、美術にも、永へに芳香を放つてゐる。

今にして回顧すれば、それはさながら美しい繪卷に外ならない。

都の移された(四)翌々年の冬、太安麻侶は敕を奉じて古事記を撰した。風物荒寥たる大和盆地北邊の山河、邸宅の倘疎な新都を包んで、粗野な感じの滿ちてゐる所、霜の白い朝、月の傾く夕、蕭條たる景色を

(一)第四十三代。
(二)生駒郡郡山町。奈良市の西南方。
(三)第五十代。
(四)和銅五年（一三七二年）正月。

(一)生駒郡にある。大阪府(河内國)に跨がる。
(二)一四〇六年。
(三)添上郡春日郷の東にある名山。海拔五〇〇メートル。

眺めながら、西の方生駒(一)の山陰に落ちて行く晷影(ひかげ)を憾みつゝ、夜を日に繼いで功程を急いだ人々の衣の袖に、霜夜のこほろぎが音もなくとまつたかも知れない。聖武天皇が大佛建立の御志を立てさせられてから幾年月が流れて、天平(二)十八年十月漸く燃燈供養を催された時の御有様、それは冬の初であるから、樹々の梢はもはや色づいたでもあらう。春日山(三)西麓の鬱蒼たる林間に、燃(た)きつらねた一萬五千七百餘抔(ほう)の燈明が、風に搖いで隱顯する。錦繡の衣を華やかに裝うた數千の僧侶が、長蛇の樣な列を作り、脂燭(しそく)をかゝげて讚歎供養しながら三たびめぐる。梵唄(ぼんばい)の響、誦經(ずきやう)の聲、さながら淨土を見る樣な莊嚴華麗な光景であつた事であらう。

〇

聖武天皇の御側には、日に配せられる月の樣に、美しくも貴い光明皇后の、端麗比ひなき御姿を、常に仰ぎ見るのである。皇后は篤く

(一)卷八、相聞に見える。

佛敎に歸依あらせ給ひ、慈悲の御思深くわたらせられ、悲田院を設け、施藥院を置いて、孤兒や貧民などを惠み給ひ、多くの美しい物語を殘させられた。萬葉集(一)には

わが背子(せこ)とふたり見ませば幾何(いくばく)か　この降る雪のうれしからまし

光明皇后(木村武山筆)

といふ皇后の御歌を收めてある。これは雪の降る日に天皇に奉つた御歌である。聖主賢后の、この樣に豐かな人間味をもたせ給うた事が、この上もなく嬉しい。

〇

果てしなき思出を胸に懷いて奈良に遊ぶ者は、停車場より直ち

に公園に向ふであらう。(一)興福寺の五重塔を左に、猿澤池を右に見て、奈良帝室博物館を訪れゝば、藝術の粋を蒐めた室毎に、遠く千年の昔の夢が漂ふのを覺える。

菊の香や奈良には古き佛たち　芭蕉

天平の古佛には、えならぬ氣高さと懷かしさとがある。やがて東大寺に足を運べば、名高い南大門の二王像に先づ眼をみはる。これは鎌倉時代の初、運慶(二)、快慶(三)といふ名工が、多くの弟子を率ゐて造つた巨像であつて、體勢雄偉、堂々として威風四邊を壓する趣を備へてゐる。

この二王に門を衛らせて、金堂の直中に安坐まします盧遮那佛は、「奈良の大佛」として名聲海の內外に遍く、慈眼を垂れて一切衆生を憐ませ給ふ御相好、貴しとも貴し。昔はその後方に講堂があり、その左右に東塔、西塔があり、七堂伽藍儼として存して居つたが、たび

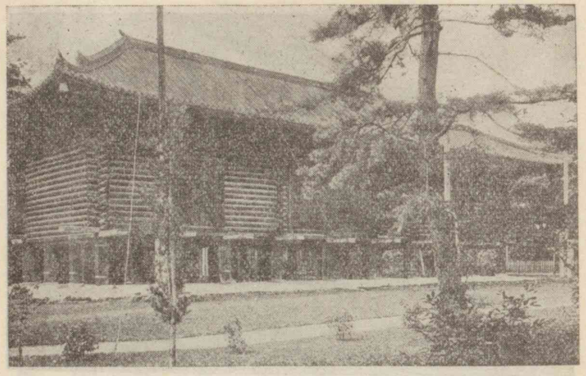
(一)法相宗。藤原鎌足の創建。もと藤原氏の氏寺であつた。

(二)康慶の子。初め京に住し後鎌倉に移つた。世にいはゆる鎌倉佛師の祖。後鳥羽天皇から順德天皇(一八四六—一八八〇年)頃までの人。

(三)康慶の弟子。佛師の巨匠として運慶と並び稱せられる。

兵燹

たび兵燹にかゝつて、ありし世の面影はうつろひ、三月堂や正倉院が、多くの珍寶を藏めて、懷古の情をそゝるばかりである。



正倉院

公園の鹿は能く人に馴れて、餌を求めながらついて來るのが愛らしい。春日神社の神鹿として古から崇められ、保護されてゐる。一の鳥居より奥、老樹の鬱蒼として生茂る所、苔むした石燈籠の限りもなく路の兩側に立並んでゐる傍、どこに行つても彼等の人懷かしげな姿を見ぬ事はない。

興福寺は藤原氏の氏寺。春日神社はその氏神。昔此所の僧兵共が、春日の神木を奉じ、武裝して朝廷に强訴し參らせた時にも、彼等の

（一）今の支那浙江省の郡、もとの寧波。唐の時代に我が遣唐使は此所に上陸した。
（二）古今集巻九羇旅歌に見える。

祖先は、その優しげな眼を擧げて、遠くまで見送つたであらうと思へば、そゞろに微笑まれる。

○

阿倍仲麻呂は唐より歸朝しようとして、明州（一）の海邊に立ちながら、

あまの原（二）ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

と歌つた懷鄕の思の切なさが、身にしみじみとしみわたるのを覺える。その山に月の登るのを見ては、誰しも哀を覺えるであらう。その月は、今は田園となつた舊都を一面に照す。北の方、大

三笠山

（一）律宗の本山。生駒郡都跡村字五條。天平寶字三年（一四一九年）唐僧鑑眞の創立。
（二）法相宗の本山。唐招提寺の北にある。白鳳中天武天皇の御願によつて飛鳥に創されたが、養老二年（一三七八年）現地に移した。
（三）喜光寺ともいふ。法相宗。生駒郡伏見村字菅原にある。養老五年（一三八一年）の創建と言ふ。

極殿の遺址より南を眺めれば、大和の山川は唯一眸の裡に集り、帝都經營の精神の雄大なのを感得するに餘りがある。道路の規則正しく縱橫に交錯してゐるのは、昔の街路の名殘を留めてゐるのである。その西邊を西の京といふ。唐招提寺（一）藥師寺（二）菅原寺（三）などの名刹が並んでゐる。月の夜にも宜し、花の曙にも宜し、四季をり〳〵の風情は、何時も旅客の心を捉へるのである。

それは何時も詩興、畫趣の盡きない所である。そのうちでも秋の風情はまた一入である。古き都を追憶する心には、寂しさの伴なふ方がしんみりするからであらうか。木々の梢の色づく頃、明月の影を踏んで嫩草山の麓に立てば、滿地の露、清光を宿して、氣も心も澄みわたるばかり。をりからいづこよりともなく友呼ぶ鹿の聲が聞える。切々たる哀音が木立の間に消えて行く時、遠い〳〵故鄕（ふるさと）の想念が夢の樣に浮ぶ。私は覺えず口ずさんだ、

牡鹿なく舊都の秋の寂しさに
　ゆめよ昔の友をしぞ思ふ

秋になると、今でもその鹿の鳴く音を思ひ出すのである。

四　家居のさま　吉田兼好(一)

家居のつき〴〵しくあらまほしきこそ、假のやどりとは思へど、興あるものなれ。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみ〴〵と見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心ある樣に、すのこ、すいがいのたよりをかしく、うちある調度もむかしおぼえてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くのたくみの心を盡して磨きたて、唐の日本の珍しくえならぬ調度ども並べ置き、前栽のくさ木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。

おほかたは、家居にこそ事樣は推しはからるれ。

後徳大寺の大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて繩を張られたりけるを西行が見て、「鳶のゐたらん何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ。」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾(一)小路の宮のおはします小坂殿の棟に、何時ぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや、「烏のむれゐて池のかへるをとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなん。」と人の語りしこそ、さてはいみじくとこそおぼえしか。後徳大寺にもいかなる故か侍りけん。○

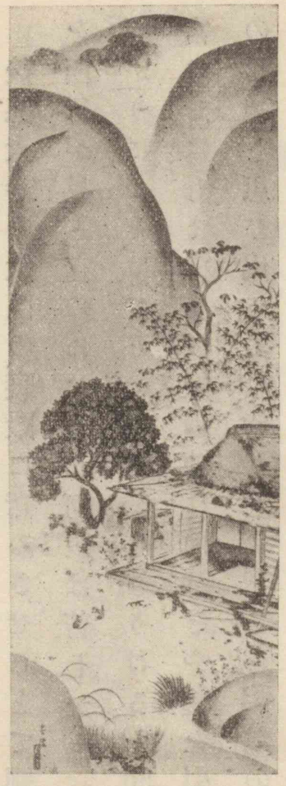
(一)鎌倉時代の文學者、歌人。京都の人。正平五年(二〇一〇年)寂、年六十八。

つき〴〵し

(一)龜山天皇の第十一皇子性惠法親王。

(一)京都市東山區山科。

神無月の頃栗栖野(一)といふ所を過ぎて、或山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道を踏分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝかけひのしづくならでは、つゆおとなふ者なし。閼伽棚に菊、紅葉など折散したる、流石に住む人のあればなるべし。



栗栖野の里
(中村岳陵筆)

かくてもあられけるよと哀に見る程に、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少し事さめて、この木なからましかばとおぼえしか。

○

同じ心ならん人としめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなく言ひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆたがはざらんと向ひゐたらんは、ひとりある心地やせん。

うらなく

(一)「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる」(古今集、よみ人知らず)

互に言はん程の事をば、げにと聞くかひあるものから、いさゝかたがふ所もあらん人こそ、我はさやは思ふなど爭ひにくみ、さるからさぞともうち語らはば、つれ〴〵慰まめと思へど、げには少しかこつかたも、我とひとしからざらん人は、大方のよしなし事言はん程こそあらめ、まめやかの心の友には、遙かに隔る所のありぬべきぞわびしきや。

○

飛鳥川(一)の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび行交ひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李もの言はねば、誰と共にか昔を語ら

んゝまして見ぬ古のやんごとなかりけん跡のみぞいとはかなき。

京極殿、法成寺など見るこそ、志とゞまり、事變じにける樣は哀なれ。御堂殿(一)の造り磨かせ給ひて、莊園多く寄せられ、我が御族のみみかどの御うしろみ、世のかためにて、行末までと思しおきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんと思してんや。大門、金堂など近くまでありしかど、正和(二)の頃南門は燒けぬ。金堂はその後たふれ伏したるまゝにて、とり建つるわざもなし。無量壽院ばかりぞそのかたとて殘りたる。丈六の佛九體いと尊くてならびおはします。行成(三)大納言の額、兼行(四)が書けるとびら、あざやかに見ゆるぞ哀なる。法華堂なども未だ侍るめり。これまた何時までかあらん。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば萬に見ざらん世まで思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

(一)藤原道長。
(二)第九十五代花園天皇の御代。(一九七二―一九七六年)
(三)藤原行成。書の名人で、小野道風、藤原佐理と共に三蹟と稱せられた。
(四)藤原兼行。

○

或者子を法師になして、「學問して因果の理をも知り、說經などして世渡るたづきともせよ。」と言ひければ、敎のまゝに說經師にならん爲に、先づ馬に乘習ひけり。輿、車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つのわざやうやう境に入りければ、愈、よくしたく覺えて嗜みける程に、說經習ふべきひまなくて、年よりにけり。

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若き程は諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末ひさしくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうちおこたりつゝ、先づさしあたりたる目のまへの事

因果の理
世渡るたづき
桃尻
境に入る

にのみまぎれて月日を送ればこと〳〵になす事なくして身は老いぬ。終に物の上手にもならず、思ひし樣に身をも持たず、悔ゆれども取りかへさるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くにおとろへ行く。

されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、何れかまさるとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てゝ一事を勵むべし。一日のうち、一時のうちにも、數多の事の來らん中に、少しも益のまさらん事を營みて、その外をばうち捨てて大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。例へば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人に先だちて小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨てて十の石につく事は易し。十を捨てて十一につく事は難し。一つなりともまさらん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多

くまさらぬ石には換へにくし。此をも捨てず、彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず、此をも失ふべき道なり。

京に住む人、急ぎて東山に用ありて既に行きつきたりとも、西山に行きてその益まさるべき事をおもひ得たらば、門よりかへりて西山へ行くべきなり。此所まで來つきぬれば、この事をば先づ言ひてん、日をさゝぬ事なれば、西山の事はかへりてまたこそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠、卽ち一生の懈怠となる。これをおそるべし。

一事を必ず成さんと思はば、他の事の敗るゝをもいたむべからず。人の嘲をも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。

—徒然草—

(一)詩人。名は又平。明治七年堺市に生れた。無弦弓、塔影、醉茗詩集等の外、童謠、隨筆の著作が多い。

葉守の神

五　落葉を焚く歌

河井醉茗(一)

秋晴の朝、庭守は
黄なる、かばなる、雌黄なる
木の葉、草の葉うづだかく、
火をうつさんとかゞまりぬ。
夜にうるほひし露霜も、
一葉一葉に乾きゆく
畑のかげに立ちそひて、
葉守の神やあらはれん。
眞夏大野を覆ひたる

うらがる

國つ鎭めの公孫樹、
光に透いて金葉の
みな地に落つるひゞきかな。
櫻の精は遠春の
海を渡りて去ににけり。
朽ちてはかろき乾き葉の
梢はなるゝ力かな。
常綠なるべき檜葉杉葉、
うらがれたるがめら／＼と、
火になりやすき秋のはて、
地の美は空にをさまらん。

をのゝく

(一)佛文學者、小說家。東京帝國大學文學部講師。明治二十三年福岡縣に生れた。蘇生、人間繁榮、未來の天才等の著がある。

機にかゝれる織ざぬの
自然のあやのまばゆきも、
捲かるゝまゝに彼方なる
はてしなき手に渡されぬ。

あゝ落つる葉に驚きて
烟をあぐる庭守よ、
萬葉焚いて盡きせざる
林に入らばをのゝかん。

——醉茗詩集——

六　生活の心境

豐島與志雄(一)

人の生活に最も大事なのは、自分の生を愛し慈しむ感情である。

生きてゐるといふ事に對する自覺的な輝かしい感情である。なぜならば、さういふ感情からこそ、本當に純な素直な力強い生活心境が生れて來るのだから。

この自分の生を愛する心を、我々は怱忙たる人生のうちにあつて、往々にして失ひがちである。そして第二義的な物に――生の本質にではなくして、生の便宜たる物に――ばかり眼を向けがちである。名聲だの金錢だのといふ樣な物が、更に卑近な方面では、衣食住に關する餘贅な物が、我々の前に立ちふさがつて、我々の心を惑はし煩はしがちである。勿論、それ等の物は生活に必要であり、活動力を刺戟しはする。しかしながら、それ等の物に囚はれる時、それ等の物ばかりを追求する時、人は唯功利に走つて、本當の生活の味を味はひ得なくなる。それ等の物が目的となつて、生きる事が方便となる。

自分の生を——一生を方便とする、それ程みじめなあさましい事があらうか。人に取つては、生きる事が目的であつて、名聲や金錢や衣食住に關する餘贅などは、生きる爲の方便であるべきである。勿論、茲に言ふ生きるといふ事は、單に生命を持續する事ばかりでなく、生きるといふ事が必然に包含してゐる仕事などをも含めて言ふのである。そして人を正しく生かすものは、己の生を愛する心である。己の生を愛し慈しむ心を、我々は大自然に接する時、最も多く體得する。

大自然に接すると、我々は自己の微小を感ずる。人生に於て我々の眼を強く牽きつけてゐたあらゆる物の價値が一時に拂拭(ふつしよく)され、すべての物の中心であつた自分自身が微々たるものになつて、唯悠久永劫な大自然のみが、何物にも無關心な大いさで君臨する。その時、我々自身はもはや地上の蟲けらにも等しく、濱の眞砂の一粒

にも等しくなる。樣々の雜念にふくれあがつてゐた我々の心は、それ等の雜念を拂ひ落して、赤裸々な清さに澄みかへり、樣々の雜事をまとつてゐた我々の生は、それ等の雜事を拂ひ落して、唯あるべきまゝの姿で横たはる。其所には最早、生も死もなく、生死を超えた悠久な落著のみがある。そしてこの偉大な靜平の中に於ては、ほつりとさえた心の眼が、自分のあらはな生の上にぢかに据ゑられる。それは輝かしい直接内觀の瞬間である。生きてゐる事が、いかに有難く貴いかを、しみ〴〵と感じさせられる。そして自分の生を愛し慈しむ念が、胸の底から湧上つて來る。

深山幽谷に身を置く時、大海に舟を浮べる時、或は仰いで大空に見入る時、我々は最初、自己の微小を感ずるけれども、何等かの妄念に支配されない限り、我々はその感じに壓倒されるものではない。自己を微々たる物と感ずるのは、あらゆる雜念雜事を拂ひ去つた

小我大我

赤裸な、平素見なれない自分自身に對する一時の賴りなさに過ぎない。心を鎭めて觀ずれば、自己の微小はやがて自己の偉大となる。「小我を去つて大我に還る。」とは、この間の消息である。たとひ我々の生が、落散る一枚の木の葉に等しからうと、その一枚の木の葉は、やがて深山幽谷全體の氣魄に相通ふものである。たとひ我々の生が、波間に漂ふ一の泡沫に等しからうと、その一の泡沫は、やがて大海全體の力に相通ふものである。たとひ我々の生が、一のほのかな星の光に等しからうと、その一のほのかな星の光は、やがて天空に散布してゐる無數の星辰の輝きに相通ずるものである。しかも不思議なのは、微々たる自分の生を靜かに見守る事に依つて、さういふ廣々とした境地へ踏出して行く生きた心の働である。生きてゐるといふ事が、いかに輝かしい貴い事であるか。我々は大自然に接して始めて、本當に自分の生を愛し慈しみたい念が、胸の底からしみ

(一)護良親王。延曆寺の大塔にゐられたので大塔宮といふ。
(二)奈良市外にある。律宗。
(三)元弘元年(一九九一年)九月二十八日。

じみと湧上つて來る。

七　熊野落　その一

般若寺樓門

大塔宮(一)二品親王は、笠置の城の安否を聞し召されん爲に、暫く南都の般若寺(二)に忍んで御座ありけるが、笠置の城既に落ち(三)て、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身を隱さるべき所なく、日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隱れて、露に臥すうづらの床に御淚を爭ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を尤むる里の犬に御心

(一)奈良興福寺の北にあつた同寺の末寺の一。

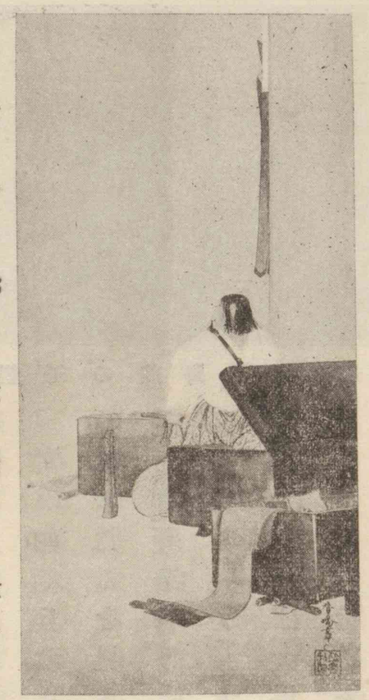
を悩まされ、いづこととても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されける所に、(一)一乗院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

をりふし宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防防ぎて落ちさせ給ふべき樣もなかりける上、隙間もなく兵既に寺内にうち入りたれば、紛れて御出であるべき方もなし。「さらばよし自害せん。」と思し召して、既におしはだ脱がせ給ひたりけるが、「事かなはざらん期に臨んで腹を切らん事はいと易かるべし。若しやと隱れて見ばや。」と思し召しかへして、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中に、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きか

これ體

夢に道行く心地

づきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されば、やがて突立てんと思し召して、氷の如くなる刀をぬいて御腹にさし當てて、兵、此所にこそ。」と言はんずる一言を待たせ給ひける



大塔宮脱危（谷口香嶠筆）

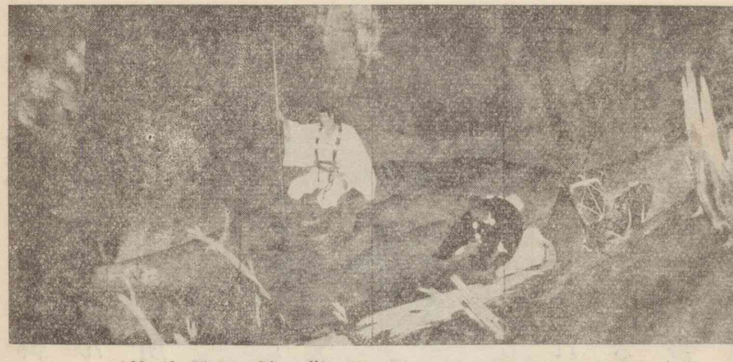
御心のうち、推量るも尚淺かるべし。

さる程に兵佛殿に亂れ入つて、佛壇の下、天井の上までも殘る所なく搜しけるが、餘りに索めかねて、「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開いて御經を取出し、底を飜して見けれどもおはせず。「蓋開きたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中を出去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心地して、

(一)支那唐代の高僧。印度に入り大部の經文を持歸り、またそれを漢譯した。

冥應

信心肝に銘ず



護良親王の熊野落（磯田長秋筆）

尙櫃の中におはしけるが、若しまた兵の立歸り委しく搜す事もやあらんずらんと御思案あつて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

案の如く兵共また佛殿に立歸り、「前に蓋の開きたるを見ざりつるがおぼつかなし。」とて、御經を皆うち移して見けるが、からからとうち笑うて「大般若の櫃の中をよくよく搜したれば、大塔の宮はいらせ給はで、大唐の(一)玄弉三藏こそおはしけれ。」と戲れければ、兵皆一同に笑うて、門外へぞ出でにける。

これ偏に摩利支天の冥應、または十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙

(一)和歌山縣牟婁郡をひろく熊野と言ふ。

(二)則村の第三子。延暦寺の律師。初め護良親王に從ひ、後尊氏の叛に與した。

(三)義光。信濃の人。元弘三年（一九九三年）吉野城の陷らうとした時、大塔宮の身代りになつた。

先達

護良親王の熊野落（磯田長秋筆）

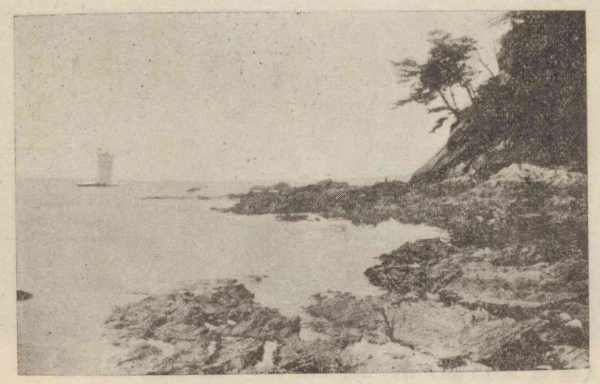
御袖を濕せり。

八　熊野落　その二

かくては南都邊の御隱所もかなひ難ければ、即ち般若寺を御出でありて(一)熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊、(二)赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、(三)村上彥四郎、片岡八郎、矢田彥七、平賀三郎彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

龍樓鳳闕
華軒香車
勤修
(一)和歌山縣日高郡にもあるが、此所は兵庫縣(淡路島)津名郡由良町。和歌山對岸の港。
濱木綿
(二)和歌山縣海草郡。

この君もとより龍樓鳳闕の內に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御步行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、何時習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、おこたらせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見とがむる事なかりけり。

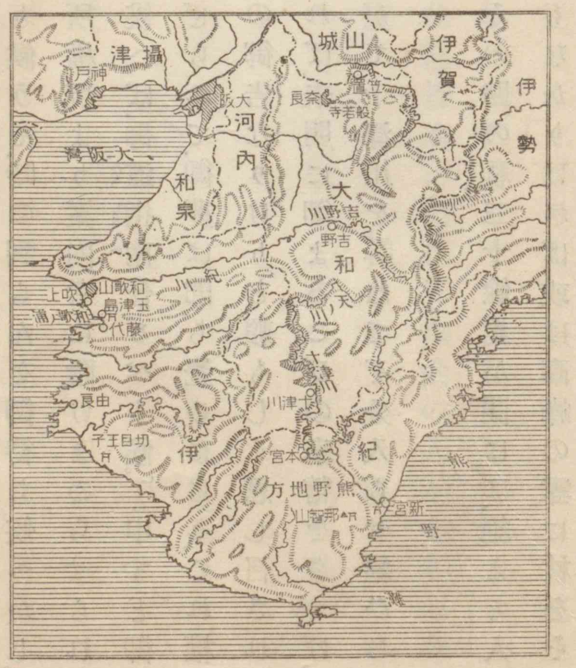

和歌浦

由良(一)の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の楫緒絶え、浦の濱木綿(二)幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や藤代の、松に懸れる磯の浪、

(一)海草郡和歌ノ浦。
(二)(三)共に同所附近。
長汀曲浦
雨を含める孤村の樹夕を送る遠寺の鐘
(四)日高郡切目村。
袖をかたしく

和歌(一)吹上(二)をよそに見て、月に磨ける玉津島(三)、光も今はさらでだに、長汀、曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀をもよほす時しもあれ、切目(四)の王子に著き給ふ。

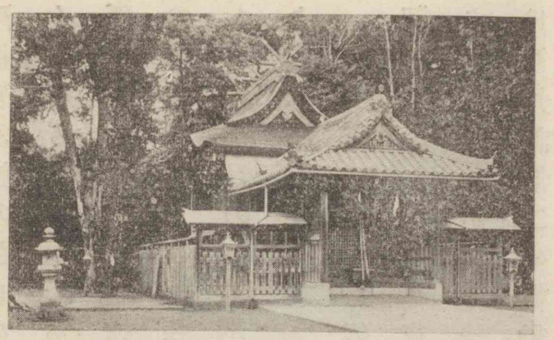
その夜は叢祠の露に御袖をかたしきて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗にはかられたり。夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみあ



(一)東牟婁郡。三山は本宮、新宮、那智。

高峰の雲に枕をそばだつ 岩漏る水に渴を忍ぶ

りける御夢に、びんづら結ひたる童子一人來つて、熊野[一]三山の間は、倘も人の心不和にして、大義成り難し。これより十津川の方へ御わたり候うて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案內者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと御覽ぜられて、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、賴もしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣をさゝげ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。



切目神社

その路の程三十餘里が間には、絕えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕をそばだてて、苔の筵に袖をしき、或は岩漏る水に渴を忍びて、朽ちたる

(一)元祿七年(二三五四年)芭蕉は鄉里伊賀への歸途、奈良から大阪に赴き、花屋仁右衛門方の別宅で病に罹った。

(二)芭蕉。

橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見あぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、御身もくたびれ果てて流るゝ汗水の如く、御足は缺損じて草鞋皆血に染れり。御供の人々もその身鐵石にあらざれば、皆饑ゑ疲れて、はかばかしくも步み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路の程十三日に、十津川にぞ著かせ給ひける。

―太平記―

九 芭蕉翁の臨終

十月九日[一]、諸子の取りはからひにて、ふるき衣裳または夜具などの垢つきたる、不淨なるをよき衣に召更へさせ參らす。師[二]いはく、「われ邊地波濤の邊に、草を敷き、石を枕として終るべき身の、かゝる

鬼錄に上る
(一)芭蕉の弟子。近江の人。
辭世
河魚の患
風神の名章
諸門葉
(淚)

美々しき褥の上に、しかも未來までの友どち賑々しく鬼錄に上らん事、受生の本望なり。昨夜目のあはざるまゝ、ふと案じ入りて、呑舟(一)に書かせたる、各詠じ給へ。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

『枯野をめぐる夢心』ともし侍り、何れなるべき。これは辭世にあらず、辭世にあらざるにもあらず、病中の心なり。しかし、かゝる生死の一大事を前に置きながら、いかに生涯好みし一風流とは言へ、これも妄執の一つとも言ふべけん。」去來言ふ、「さにあらず。日々朝雲暮雨の間もおかず、山水野鳥の上も捨て給はず、心身風雅ならざるなく、かかる河魚の患につかれ給ひながら、今はの限りに、その風神の名章を唱へ給ふ事、諸門葉のよろこび、他門の聞え、末代の龜鑑なり。」と、はなすゝり、涙を流す。眼ある者これを見ば、魂を飛ばさん。耳ある者これを聞かば、毛髮これが爲に動かん。列座の面々感慨悲想し、慟絕し

(一)俳人で醫者。近江の人。芭蕉の弟子。
(芍藥)
申の下刻
(二)廣瀨氏。美濃の人。正德五年(二三七五年)歿。
(三)武藏。

て聲なし。これ師翁一代遺教經なり。この日より殊更に衰へ給へり。泄瀉度數知れず。(去來記)

十日初時雨せり。師、夜の明方より泄瀉度數知れず、一入惱み給へり。木節(一)この日しやくやく湯を盛る。諸子うち寄り食事を進め參らせけれど、進み給はず、梨の實を望み給ふ。木節堅く制しけれど、頻りに望み給ふ故、止む事を得ず進めければ、一片味はひて止み給ふ。木節言ふ、「胃受くる所なし。死期近きにあり。」と。申の下刻に至つて人心地つき給ふ。今日は一人も食したる者なし。(惟然(二)記)

十一日朝また〳〵時雨す。思ひがけなく東武(三)の其角來る。これは東武の誰彼同伴にて參宮せし序、和州、紀州をうちめぐり、泉州より浪華に入りしが、圖らずも師の勞りおはすと聞附け、其所此所と尋ね廻り、やう〳〵に駈附けたるなり。すぐに病床に參りて、皮骨連立し給ふ體を見參らせて、且愁へ、且喜ぶ。師も見やり給ひたるまで

(粥)

(一)水田氏。近江膳所藩の物頭。芭蕉の弟子。享保八年(一七二三年)歿。

にて、唯々涙ぐみ給ふ。其角も言句なくさし俯きゐたりしを、丈草、去來、支考その外の衆、次の間に招き、御病症の始終を物語る。この夜、夜すがら伽して、思ひ寄りし事ども物語りゐたるに、亥の時頃より師夢の覺めたる如くかゆを望み給ふ。人々嬉しさ限りなく、次郎兵衛取計らひて、疾く焚上げ進め參らす。快く召されけり。朔日以來の食事なり。土鍋に殘りたるを、去來椀に移し入れて押戴き、

病中の餘りすゝりて冬ごもり　去來

去來言ふ、「趣向を他に求めず、ありあふ事ロずさみて、師を慰め參らせん。深く案じ入らず、頓に句作り給へ。」と。惟然は前夜正秀(一)と二人にて、一つの蒲團をひつ張りて被りしに、彼方へ引き此方へ引きて終夜寢入らず、はてはしら〳〵と夜明けるにぞ、その事を互に笑ひ合ひて、

ひつ張りて蒲團に寒きわらひかな　惟然

(黐)

(鬮)

一座これを聞きて、何れもどつと笑ひければ、師も笑ひ給へり。人人嬉しさ限りなく、十日以來の興にぞありける。時雨しけれど、空疾く晴れて日影さし入りたるに、蠅多く日南(ひなた)に群がりゐたり。人々もちもてさし取るに、上手下手あるを見給ひて、暫く興に入り給ひけれど、大病中の事なれば忽ち倦き給ひ、ぢきに寢所に入り給ふ。

くじとりて菜飯たかする夜寒かな　木節

うづくまる藥のもとの寒さかな　丈草

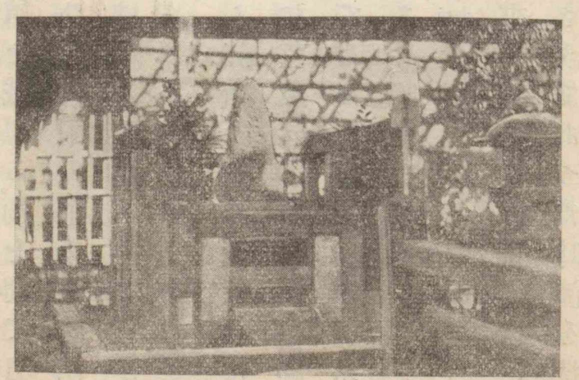
一々惟然吟聲しければ、師、丈草が句を今一度と望み給ひて、「丈草出かされたり。何時聞きても、寂しをり調ひたり。面白し〳〵。」と、しはがれし聲もて譽め給ひにけり。何時に變りし機嫌のうるはしきを喜びけるに、木節一人愁をいだける體に見えければ、其角その故を問ふ。木節言ふ、「大病中絕食なるに、俄に食の進む事あるは惡病なり。死期遠きにあらず。」と。さは知らず、各さゞめきゐたるに、夜半頃より

(一)榎並氏。大阪の人。芭蕉の弟子。
(二)大津の驛の長。芭蕉の弟子。智月尼の子。

また寒熱往來ありて、夜あけ頃より顏色土の如くに見え給ひ、暫く悶亂し、人をも見知り給はざりしが、稍あつてまた正氣になり給ひ、左右に舍羅(一)、呑舟、後よりは次郎兵衛抱き參らせて介抱し、程なく夜明くれば十二日なり。かねては閉籠り給ひしが、隔の障子もふすまも取りはなさせ、其角、去來、丈草をこれへとて向ふに見給ひ、「穢を憚れば咫尺し給ふな。」とことわり、行水を望み給ふ。木節頻りに制しけれど、頻りに望み給ふ故、止む事を得ず湯をひかせ參らせけり。座を靜かに改め、木節が醫術を盡されし事など謝し給ひ、さて三人の者を近く召され、乙州(二)、正秀を左右にし、支考、惟然に筆を執らせ、亡きあとの事こまごまと遺言し給ふ。病苦少しも見え給はず。人々奇異の思をなす。伊賀への遺書は手づからしたゝめ給ひ、外に京、江戸、美濃、尾張と漏れざる樣に遺言し終り給ふに、始終は門人中にて筆記す。次第に聲細り、痰喘にて惱み給ひければ、次郎兵衛素湯にて口を潤

屬纊

し參らす。稍あつて去來に向ひ給ひ、「路通が數年の薪水の勞、ゆめゆめ忘れ置かず。我亡きあとにはおよそに見捨て給はず、風流の交し給へ。この事賴み置き侍り。諸國へも傳へ給はれかし。」と、言ひ終り給ひて餘言なく、合掌正しく、觀音經と聞えて微に聞え、息の通ひも遠くなり、申の刻過ぎて埋火のあたゝまりのさむるが如く、次郎兵衛が抱き參らせたるによりかゝりて、寢入り給ひぬと思ふ程に、正念にして終に屬纊につき給ひけり。時に元祿七甲戌十月十二日申の中刻、御年五十一歲なり。(支考記)


芭蕉の墓

—花屋日記—

自修文

時雨月

(一)上司小劍

雨を除いては、日本の文學は餘程價値を減ずる。雨を得て日本の文學には始めて生命があるとも言ひたい。雨の中でも時雨は殊に寂をもつ。時雨は初冬の季であるけれども、晩秋のにほひの豊かなものである。

明治の初め、大阪に花屋庵鼎左といふ俳諧の宗匠があつた。自ら芭蕉の正風を承繼いだと稱してゐた。芭蕉終焉の地浪花御堂前花屋裏に因んで、花屋庵などと稱してゐた。この人、寂といふ事にはいくらか心得があつて、秋を愛する心、晩秋に憧れる魂を持つてゐたらしい。この人が、或年の夏頃から病に罹り、だん／＼に重くなつて、秋の初には死相が現れて來た。七夕祭の笹の枝に附ける短册の句が、どうやら辭世になりさうであつた。時流を拔く力のない職業俳人でも、芭蕉が特に辭世といふものを作らずに、

(一)小說家。明治七年奈良市に生れた。鱧の皮、木像、東京等の著がある。
晩秋のにほひ　晩秋らしい情趣。
正風　芭蕉の創始した俳諧の一體で、その精神は閑寂優雅を主としたものである。
死相　死人の相。
時流を拔く　時代の好尙から超越して眞の自己を發揮する。
職業俳人　趣味、藝術の爲に俳句に親しむのではなく、職業として俳句を弄ぶ人。

今日の句は今日の辭世、明日の句は明日の辭世、と言つてゐた心ぐらゐは悟り得て、殊更に辭世の句などは遺さぬ積りでゐたらしいが、唯芭蕉の死んだのと同じ十月――時雨月――にこの世を去りたいと願つてゐたのである。これとても甚だ俗な考で、芭蕉がいかに日本空前の大詩人だとは言へ、それと同じ月に死んだからとて何になるか、……と言つてしまへば、身も蓋もないが、同じ事なら、翁の祥月に初時雨の音を聽いて、地に入りたいと思つたのは、殊勝な心掛とも言ひ得るだらう。かくして、だん／＼衰へ弱つて來る鼎左の心身は、九月半ばになると、はたの見る眼もいぢらしく、この分では來月までたどりつけようか、と、自ら危んでゐるのが、よく分つた。瀕死の病人ながらも、氣が氣でないといふ焦り方であつた。それが病に障つて、生命は尙も縮まつて行く。

鼎左はもう昏々として、夜の明けるのも、日の暮れるのも知らない體であつたが、その朧げな夢路をたどる樣な殘りの魂にも、

俗な考　俗っぽい考。
祥月　人の死んだ月に當る月。
殊勝な心掛　健氣な心掛。奇特な心掛。
はたの見る眼も云々　わきで見てゐてもいたはしいもので。
昏々　意識のぼんやりしたさま。
朧げな夢路をたどる樣な云云　やつと生きてゐるといつた意識のはつきりしない心にもの意。

幽冥の路　冥土の路。

(一)食鹽水注射。大出血、手術後虚脱並びに損傷の際に血壓を増進する目的か、または諸種の藥物、食餌中毒、急性傳染病時に體内の毒素を稀薄にする爲などに行はれる。

(二)昏睡狀態に陷つた患者に對して興奮劑として注射するもので、カンフルチンキ(樟腦一分、酒精七分、水二分の溶液)を用ひる。

(三)朝鮮人蔘。五加科の多年草本で、朝鮮、滿洲の原産。根は高價な萬能藥用として古來名高い。

月のかはるといふ事だけは忘れなかつた。九月もだん〳〵末に及ぶと、日が短くなつて、夜は長く、冷々した大氣は、病床の衾にもひし〳〵と迫つて來た。「まだ時雨月にならんかなあ。」鼎左はもつれる舌で、やうやくそれだけの言葉を、看護の者の耳にまで、蚊の鳴く程に聞かせては、またうつとりと幽冥の路に急がうとする。その魂を呼留めて「宗匠、もうあと三日で御座ります。しつかりなされませ。氣を確かにお持ちになつて……。」附添ふ門弟たちも、半分死んでゐる宗匠に向つて、嘘を言ふには忍びなかつた。その日は誠に九月二十七日、生憎と大の月で、暦には三十日がある。瀕死の鼎左に取つては、この三日が生れてから今までの月日よりも永い程に感じられたかも知れなかつた。食鹽(一)やカンフル(二)やを注射する醫術のなかつた時代に、醫師は唯朝鮮渡來の人蔘(三)を用ひて、病人の精神を興奮させつゝ、肉を離れようとする靈を引留めて置くより外はなかつた。

引明　あけがた。

蟲の息　たえ〴〵な氣息。

彌陀の來迎　臨終の際に彌陀が出現して淨土に迎へること。

元祿の涅槃　涅槃とは釋迦の入滅を言ふのであるが、崇拜する元祿の俳聖芭蕉の死を涅槃と見たもの。

あの世への行脚　芭蕉は行脚ばかりして居つたのでかう言つたのである。

鼎左の待ちかねた十月の朔日は、やつとの事でやつて來た。

夜の引明に、病宗匠の枕頭へ膝行り寄つた高弟某は、全く蟲の息の鼎左の耳へ口を寄せて、低いがしかし力のある聲で、

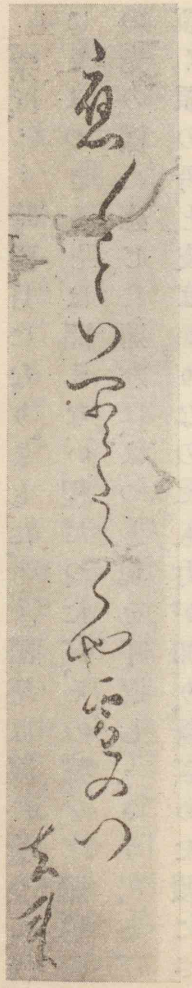
「宗匠、……時雨月になりました。……」語尾は涙に曇つて、傍の者にもはつきりとは聞えない程だつたが、その聲をば彌陀の來迎の光の樣に感じた鼎左は、はつと魂を呼返して、「さうか。」とばかり、頷く顎の、骨と皮ばかりなのにも力が加り、蒼ざめた顔にさへ、門弟どもの氣のせゐか紅味がさして、晴々とした輝きを見せた。芭蕉と同じ月、元祿の涅槃に近く往生を遂げるといふ事が、鼎左一生のねがひだつたのである。かくて鼎左は、翌二日の曉に、あの世への行脚にと旅立つた。

詩人としての價値は別として、「時雨月に死にたい、どうしてもそれまでは生きながらへるのだ、無理にも生きのびるのだ、死んでも死なない。」と、強く齒がみをして、耐へに耐へた心がいぢらし

く、またゆかしいではないか。
これを秋の詩人の本領とは言ひ得ないであらうか。

一〇 枯野

金屏の松の古びや冬ごもり　芭蕉
あれ聞けと時雨ふる夜の鐘の聲　其角
蒲團著て寢たるすがたや東山　嵐雪



去來筆蹟

蕭條として石に日の入る枯野かな　蕪村
なが〳〵と川一筋や雪の原　凡兆(一)
大根引大根で道ををしへけり　一茶

應々といへどたゝくや雪の門　去來

(一)俳人。加賀國金澤の人。京都で醫を業としてゐた。芭蕉の門人。歿年不詳。

一一 俳句の修辭　沼波瓊音(一)

俳句を解するには、先づ俳句の修辭上には一種獨得の約束のある事を知らなければならぬ。俳句の詩形は最も短い。僅か十七文字である。隨つて、自己の感想を殘らず文字に現して配列する事がむづかしい。入れたい文字も勢ひ省く。言ひたい言葉も止めにせねばならぬ。詩形の短いだけそれだけ省略の必要を適切に感ずるので、この點に於ては、恐らく俳句程文字の極端に省略される詩は、他にその例を見ぬであらう。

提灯を消せと御意ある水雞かな　蕪村

この句は、供の者に提灯を持たせてほく〳〵來かゝると、をりから水雞が鳴き出したので、供の者に、持つてゐる提灯の灯を消せと命じた所を詠んだのである。句の文字だけを解釋すれば、「消せと御

(一)俳人、國文學者。名は武夫。愛知縣の人。昭和二年歿、年五十一。芭蕉の臨終、しろ椿、徒然草講話等の外に、紀行、隨筆、感想、句集等の著がある。

意ある」までは誰にも分るであらうが「水雞かな」だけで鳴くを略するのは、かういふ詠み方には普通として一般に用ひられてゐる。

　ほとゝぎす平安城を筋かひに　　蕪村

この句は、時鳥が鳴いて平安城頭を筋違に飛行くといふので、單に時鳥と上五字に置いただけで鳴いてを、筋かひにだけで飛んで行くを省いたのである。

　春雨やものがたりゆく蓑と傘　　蕪村

「蓑と傘」。この省略法も多く用ひられてゐる。蓑を著てゐる人と、傘をさしてゐる人とが、春雨のしと〳〵と降る中を話しながら歩みつゝ行くといふのである。

夜半翁句繪巻（その一）

以上は俳句に最も普通な修辭法として、常に多く使用される省略法であるが、今左に極端な省略の例を擧げよう。

　奈良七重七堂伽藍八重櫻　　芭蕉

の如き、たゞに名詞を配列しただけで、一つのテニヲハすらないといふに至つては、いかに省略が甚だしいとは言へ、實に驚かざるを得ない。若し門外漢をしてこれを讀ましめたならば、たゞに了解に苦しむのみならず、先づけゞんに堪へぬであらう。助動詞なく、動詞なく、テニヲハなく、單に名詞の配列のみを以て俳句なりとしたならば、門外漢で俳句の意味を解する者があらうか。かくの如き俳句は、省略法を知ると同時に、全く讀者の聯想力、想像力にまつて、始めて首肯し得るものである。奈良七重はたゞ音調の上の掛言葉より來て、下五の八重櫻は上の七重を受けて、一きは句調を華やかにしたので、七堂伽藍の莊嚴なのが八重櫻の艷麗なのと相反映し、相調

和した壯觀無比の風光を詠じたのである事を知つたならば、僅かに趣味を解する者も、猶一幅の畫に接する思があるであらう。
文字の省略に獨得な自由を有する俳句は、文字の顚倒も盛んに用ひられる。これは省略法と共に、また必要缺くべからざる一要件たる事を知らなければならぬ。

我が宿の鶯聞かん野に出でて　　蕪村

「野に出でて我が宿の鶯聞かん」とあるべきもの。

鴨おりて水まで歩む氷かな　　嵐雪

「鴨おりて水まで氷を歩むかな」とあるべきもので、一歩進めて言へば「鴨おりて水の所まで氷の上を歩むかな」とあるべきものである。卽ち、鴨がおりて、水のある所まで氷の張つた上を歩いた光景を敍した句である。そしてこの句は、「水の所まで」「氷の上を歩む」に於て、文字の顚倒と省略と同時に用ひられてゐる。

蛇落ちて驚く崖の若葉かな　　維駒

ふきの葉にこけた手を拭く垣根かな　　紅葉

前句は「崖の若葉より蛇の落ちたるに驚くかな」後句は「垣根のふきの葉にてこけた手を拭ひたるかな」とあるべき所を、顚倒と省略とを同時に併用したものであつて、かういふ句は、得て門外漢に疑問の種を蒔くのである。一讀句意が分る樣で、そして分らぬ所がある。卽ち「驚く崖の若葉かな」とあるのが、第一の疑點になる。つまり、蛇が驚いたのか、人が驚いたのか、ちよつと解釋がつかぬのだ。これは、多分若葉が驚いたのであらうなどと、遂には突飛な推測が、門外漢には出ぬとも限らぬであらう。「こけた手を拭く垣根かな」も同じ筆法の讀者には「垣根で手を拭つた樣にも取れるであらう。否、大抵はさう曲解する。こは全く俳句獨得の約束を知らぬからである。俳句が以上の如く、修辭法に特別多大な自由を許されてゐるのは、自然

その短詩形なるが故である。
詩には諸種の類があると共に、形式もまた別れてゐる。その中に於て、最も短い詩形としては、恐らく俳句の右に出るものはあるまい。俳句の詩形は、僅かに假名の十七字、故に十七字詩などとも稱へられてゐる。
この十七文字は、五言、七言、五言の三段句切に、五七五調の調子に詠まれるのが俳句普通の形式である。しかし、時に十六字たり、十五字たり、それより少いのもある。また十八字、十九字、時にそれ以上のもある。甚だしく長いのに至つては、實に三十字近いのもある。今試に左に例を擧げよう。

ふるいけやかはづとびこむみづのおと　芭蕉

をちこちをちこちと打つきぬたかな　蕪村

上五言たるべきが四言となつて、十六字四七五調をなしてゐる。

てもさても福相の牡丹かな　一茶

中七言たるべきが五言となつて、十五字五五五調をなしてゐる。

女俱して内裏をがまん朧月　蕪村

夜半翁句繪卷（その二）

鶯のあちこちとするや小家がち　蕪村

黒塀や星に透かして梅を得たり　子規

前者は上五に於て一字を増し、中者は中七に於て一字を加へ、後者は下五に一字を剩す。而してこれ皆十八字たるを知るであらう。

（十九字）山の家や留守に雲起るすしの石　子規

（二十字）芭蕉野分してたらひに雨を聞く夜かな　芭蕉

(二十一字)　牡丹蘂深く分出づる蜂の名殘かな　　芭　蕉

(二十二字)　古酒杯中の秋に堪へずや泣上戸　　紅　葉

更に字數の多いのを索めれば、

福壽草の寸梅の尺而して松の丈餘なる　　春(一)　葉

の様なのもある。數へ來つてその數二十八字、普通より多いこと實に十一文字、門外漢をして、その俳句たるや否やを疑はしめるのは勿論であらう。しかし、かういふ破格の句も、調子はおのづから五七五調に從つて延びたものである。これ等變調破格の句は、千百中稀に一二を出だすのであるから、この僅少な特殊の物を擧げて、十七字に限られた俳句の定義を、俄に覆す事は出來ぬであらう。要するに、破格奇調の俳句は、詩趣の感興の湧逸した結果、句勢がおのづからその規を奔脱して、式を破り格を脱したものであつて、特別の場合に於て成つたものとして差支ない。またかくの如くにして成ら

(一)小說家。柳川春葉。名は專之。東京市の人。大正七年歿、年四十二。

なければならない性質のものである。

俳句は如上の形式のもとに、特別の自由を有する修辭法を以て、自己の美的感想を遺憾なく發揮せしめ得る詩であつて、他の詩と拮抗して些の遜色もない完全なものである。故に俳句は、時に抒情詩たり、敍景詩たり、敍事詩たる事がある。決してその一種類に限られるものでない。されば天然を詠ずると、人事を詠ずると、或は主觀に、客觀に、各自の欲する所に隨つて自由自在である。

一切の詩が理窟を許さないといふ定義は、俳句もこれを破る事が出來ぬ。然るに俳句を理窟的に解釋しようとしてゐる者がある。これ等の輩は、俳句に理窟をこじつけて、强ひて勿體がるので。かくの如きは、俳句を尊からしめようとして、却つてその美を穢すもので、妄想もまた甚だしと言ふべきである。例へば、芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」の吟を以て禪學悟道の句と言ひ、或は人世觀を蛙な

(一)平治元年(一一八九年)十二月十九日。
(二)藤原顯頼の子。權大納言正二位に進み、大納言といつた。承安四年(一一八四年)歿、年五十一。
(三)藤原信頼。光賴の甥。平治の亂に敗れて清盛に斬られた。年二十七。

る動物の動作に託して吐露したなどと、飛んでもない理窟を附けて解釋してゐるのもある。理窟なくては安心の出來ぬ輩は、色々な穿鑿に揑造を逞しくして、故人の名句を傷つけてゐるのである。芭蕉は「古池に蛙が飛びこんで、水の音がぢやぶんとした。」といふだけを詠んだのであらう。否、必ずさうである。これ以外何の理窟も意味もない。傳授もなければ祕密もない。況や人世觀に於てをやだ。かくの如き曲解者は、いはゆる俳句を毒する者で、怪しげなこの屁理窟は、往々初學者を煙に卷いて誤らしめる事が多い。初學者たる者は、須く用心すべきである。

—俳句の作り方—

一二　光頼卿(一)の參內

さる程に內裏には同じき十九日公卿僉議とて催されけり。(二)勸修寺左衞門督光頼卿、この程は(三)信頼卿の擧動過分なりとて、不參にて

雜色
自然の事

おはしましけるが、參內して承らんとて、殊に鮮かに束帶引きつくろひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傅子の桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ、雜色の裝束にいでたゝせ、「自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、そのほか清げなる雜色四五人召具して、大軍、陣を張りて、所々門々を固く守護しけるを事ともせず、先高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。

束帶の圖

(一)藤原顯長の子。從二位權中納言となつた。

宰相

しどけなし

色代す

氣色す

紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座(いちのざ)して、その座の上﨟たち皆下にぞ著かれたる。光頼卿「こは不思議の事かな。人はいかにふるまふとも、彼は右衛門督、我は左衛門督なれば、下には著くまじきものを。」と思はれければ、(一)左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ。」と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の舅(をぢ)なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上にゐ懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲(したがさね)の裾引直し、衣紋つくろひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて參內する所なり。抑、何事の御詮ぞ。」と問ひければ、信頼卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議のさ

出仕す

壁に耳天に口

たもなし。程經て光頼卿つい立ちて、「惡しう參つて候ひけり。」とて、しづしづと歩み出でられけり。

庭上に充ち滿ちたる兵どもこれを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさゞりつるに、し出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申せば、傍なる者の「昔頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。」と言へば、また傍より「なぞ、その頼信をうち返して信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ。」と言へば、「壁に耳、天に口といふ事あり。怖し、怖し。聞かじ。」と言ひながら、皆忍笑に笑ひけり。

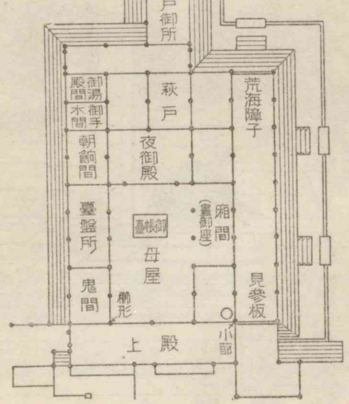
光頼卿斯樣にふるまひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小

(一)藤原惟方。檢非違使別當。
有職ゝ學ゝ積ミタル人。
(二)藤原通憲入道信西。
(三)今の京都市左京區吉田山。
先蹤ゝ先例
天氣ゝ天子ノ應
曩祖
(四)勸修寺內大臣高藤。
(五)三條右大臣定方。高藤の子。

じとみの前、見參の板高らかに踏鳴して立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の(一)別當惟方のおはしけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とてもよほされつる間參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人共なり。その中に入らん事甚だ面目なるべし。さても先日右衞門督が車の尻に乘つて、(二)少納言入道が首實檢の爲に、(三)神樂岡へ向はれける事はいかに。以ての外然るべからざる擧動かな。近衞大將、檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乘り給ふ事、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば。」とて、赤面せられけり。光頼卿重ねて、「こはいかに敕諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さゞるべき。我等が曩祖(四)勸修寺內大臣、(五)三條右大臣が延喜の聖

さしもどかる
時刻をや廻らすべき
灰燼

代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかる、程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はん事、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、



清涼殿

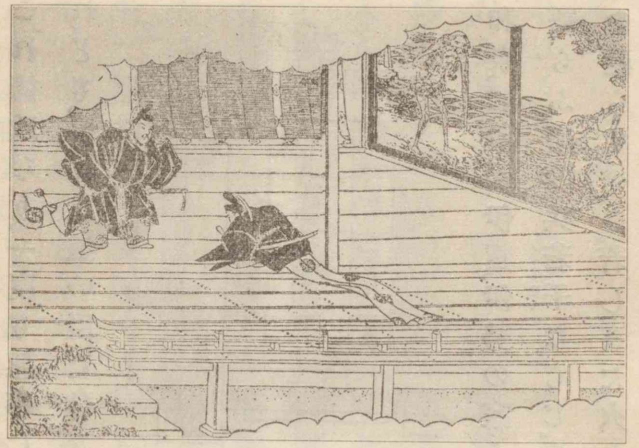
和泉、紀伊國、伊賀、伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなり。信頼卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩にわたらせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべ

相構へて

(一)第七十八代二條天皇。

(二)後白河上皇。

し。いかに況や君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべきをや。右衛門督は御邊に大小事を申し合すとこそ聞ゆれ。相構へて〳〵隙を窺ひ、玉體恙なくおはします樣に思案せらるべし。さて主上(一)はいづこにおはしますぞ。」「黒戸の御所に。」「上皇(二)は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽はいづこに。」「夜の御殿に。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。



光頼卿惟方を戒む（古版平治物語挿繪）

また朝餉の方に人音のし、櫺形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衛門督住み候へ

かげろふ

かくござんなれ

のろ〳〵しげに

宿業

(一)支那古代の隱者。堯が天下を彼に讓らうとした時、これを聞いて耳が汚れたとて潁水で耳を洗つた。

ば、その方ざまの女房などぞかげろひ候らん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかくござんなれ。主上のわたらせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷し參らせたり。末代なれども、流石に日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をいかに守り給ひぬるぞ。異國には斯樣の例ありと雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに憚る所なく口說き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、且は悲しくて、「我いかなる宿業に依つて、かゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由(一)にあらねども、今の內裏の有樣を見聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、袍の袖絞るばかり泣かれけり。信賴の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、うち萎れてぞ出で給ひける。

——平治物語——

(一)英文學者、劇作家、文學博士。名は雄藏。安政六年(一八五九年)三河國(愛知縣)に生れた。小說神髓、桐一葉、牧の方等の著の外、沙翁の飜譯がある。
(二)今の大阪市東淀川區を流れる新淀川の堤といふ。
(三)豐臣氏の功臣。元和元年(一六一五年)大阪落城の時自殺した、年六十二。
(四)今大阪府(攝津國)三島郡茨木町。
(五)石川伊豆守貞政。
(剩)命をきかばこそ

一三　長柄堤の訣別

坪内逍遙(一)

晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬連りにいなゝいて行人出づ。はや分れ行く橫雲や、殘んの星を一つづゝ、鐘が消し行くいなのめの長柄(二)堤に秋たけて、一叢蘆に風黑く、有明凄き大川水、逝きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白け行く、千草が蔭の蟲の聲、哀はいとゞ優るらん。(三)片桐市正且元は、居城(四)茨木へ立退かんと、從ふ郞等一百餘人、寅の刻に邸を立つて、大阪城を後になし、列を正して徐々と長柄堤にさし掛る。その時市正手綱を控へ、從兵を先へ進ませ、弟主膳正を呼び近づけ、改めて言ひける樣、

市「いかに弟、我昨日討手を待受け、自殺せんず覺悟なりしに、(五)伊豆守が殘兵ぬけがけなし、討手の荒膽をひしぎし爲、備ありと見たがへしか、また寄せ來らん模樣もなく、あまつさへ夜に入りては、外にありし家臣まで、變を聞きつけ馳集り、血氣のともがらこれに氣を得て、薪に油をそゝげる如く、弓、鐵砲とひしめき騷ぎ、命をきかばこそうちすておかば、珍事に及ばんも圖り難く、暫く彼等をなだめん爲、ひと先づ茨木へ引退き、後事を圖らんとは言ひしものの、昨夜ほのかに傳へ聞けば、(一)織田入道も(二)君を見限り、俄に京表へ退きし由、お家の危機愈迫んぬ。今にも關東と隙を生じ、大事に到らん事必定なり。それにつき所存あつて、先刻今村三右衞門を(三)木村が邸へ走らせたり。おつつけ三右が吉左右あらん。我はこれにて相待つべし。御身は暫く我に代り、手勢を差配し、途中に不慮の間違なき樣、一足先へ參らるべし。

片桐且元

　と言葉のうち、遙かにしたひ驅來る足音。

主「あの足音は確かに今村。　市「三右衞門か。　今「我が君これに御座

(一)織田信雄常眞。
(二)豐臣秀頼。
(三)木村長門守重成。
吉左右
差配

くだかけ

ありしか。長門樣にはおつつけこれへ。　市「ほゝ大儀、々々。滿足なるぞよ。然らば主膳は一足先へ。三右衞門も此所かまはず。我はこれにて相俟つべし。　主「仰では御座りますれど、油斷ならざる當節がら、いかなる變事あらんも知れず、　今「唯御一人この所に御座あらんは心許なし。　主「せめて我々、　二人「兩人は。　市「はて入らぬ遠慮。氣づかひ致すな。往け〳〵。　主「ぢやと申して、　市「はて往けと申すに。

二人「はゝあ。

顏見合せて是非なくも、主膳を先に三右衞門、心殘して行過ぐる。

後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤の有明方、ねぐらにさへづる小鳥の聲、川霧やう〳〵晴行けば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋昇る朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝひんがしの、空には似ぬや入る方の、月凄じき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろ〳〵とあらはるゝ、名におは阪の四衢八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、

(一)豐臣秀吉。

(二)加藤肥後守清正。

(閲)

(三)秀吉の母。

脣齒亡ぶ

(四)德川秀忠の長女。慶長八年(二二六三年)秀頼に嫁いだ。

(五)京都方廣寺の大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字があつたので、家康は自分を呪咀するものであるとしていひがかりを持ちかけた。

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下(一)かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ〳〵。取分け加藤肥州(二)逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者は才略乏しく、阿附黨同して相せめげば、大政所(三)の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世離れし御有樣。脣齒既に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、

言ひかけて聲曇らせ、

市「須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がする事なす事、いすかの嘴とくひ違ひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君(四)は、東西不和の道火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が原となり、降つて沸いたる難題(五)は、唯前門の虎にして、後に不慮

姑息因循

（艮）

の豺狼あり。かゝる仕儀となつたる事、御運の末と言ひながら、

こらへず馬より飛びくだり、彼方に向ひ平伏なし、

市「これ、しかしながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、空しく關東のわなに罹り、仰せ附けられし御遺命に、背き奉る今日の仕合。不忠とも言ひがひなしとも思し召さん。それを思へば某が、この腸はちぎるゝばかり。つぐのひ難き不臣の罪は、あの世でおわび仕らん。お宥しなされて下さりませ。

在すが如く兩手を突き、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、稍あつて心づき、

市「あゝ、我ながら不覺の至。我が大罪の御わびよりも、さしかゝるお家の安危。長門守にはいかにせし、心許なき事どもぢやなあ。

すかし眺むるをりこそあれ、遥かに聞ゆる蹄の音、程もあらせず唯一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る木村長門守重成。

木「市、正殿に候な。　市「長門殿待ちかねしぞ。

棟梁

（一）秀頼の母淀君。
（二）名は治長。
（三）名は糺。

言ふ間に馳寄るくつわづら、右手(めて)におり立ち顔見合せ、言葉はなくてそぞろにも、先づ袖ぬるゝ朝露や、颯々(へうへう)たる枯柳の枝、入方の月ゆらめきて、老行く秋の寂しさを、長柄堤に留むらん。

木「もはや豐臣の御社稷も、愈末となつたるか。棟梁と頼む足下(そこもと)まで、佞人、讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公（一）の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間(ひま)に、思ひがけぬ珍變あり、續いて足下に御討手と、昨朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日頃に似氣なく、激論の末席を蹴立て、只今退座ありしとばかり、後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る、大野（二）、渡邊（三）等が我意暴慢、この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かき切らんと二たびまで、刀の柄に手は掛けしが、貴殿の日頃の教訓を、思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりし言ひがひなさ。

鼠輩

(一)和歌山縣伊都郡高野山の北谷にある村。
(二)名は昌幸。
(三)大阪落城の際戰死した、年四十六。

悔むを且元おし宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢々申せし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜん事治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿の、既に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた、大亂破裂せんは目前なり。この上は唯偏に、籠城の計畫こそ肝要なれ。

木「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。

市「されば今御城に兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛卒、勇士も事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。

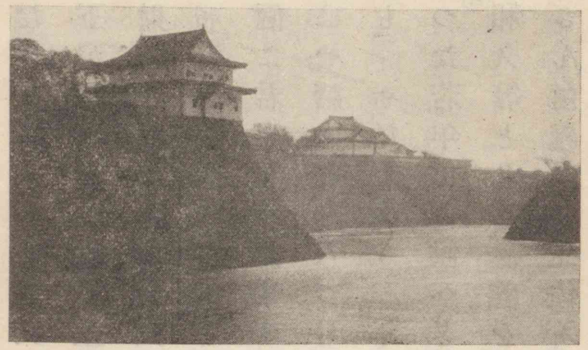
木「してその智謀の將とは。

市「今九度山(一)に隱れ忍ぶ、信州上田前の城主、眞田安房守(二)が二男、左衛門佐幸村(三)こそ、故太閤の恩を思ふ、

跋扈

上使

智勇兼備の良軍師。關ヶ原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の樣を窺ひをるを、先年お身方となし置いたり。事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし、合戰の進退は、一切かの人に任せられよ。その他關ヶ原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、何れも得易からぬ良將なるが、かねてちなみは附けおきたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳參ぜん。これ第一の手配なり。



大阪城

木「してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。

市「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木數多伐出させ、商業の爲と僞り、紀州川の川

上より、浪速津に押流させ、御船入に積みおいたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひおきたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年にわたると言ふとも、尙支ふるに餘りあるべし。　木「それに加へて故殿下が、貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。　市「甲冑、兵具も乏しからず。　木「城は名に負ふ南山不落。　市「眞田、後藤の智勇をもて、この堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、　木「たとひ關東の(一)奸老雄、利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、　市「なか〱三年四年が程には、攻落さん事難かるべし。　木「まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我また一方を承り、(二)速水、(三)御宿、(四)和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結。君臣、將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石もまた透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退く

(一)徳川家康。
(二)名は守久。
(三)名は正倫。
(四)名は宗是。

るに難かるべきや。この上は仰に從ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ市ノ正殿。　市「ほゝ、賴もし〱。唯大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とは言ひながら往時に照し、成行く末を鑑れば、　木「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野、渡邊。　市「地の利はあれども人の和なく、　木「讒佞これを蔽ふが故、　市「上、御發明にわたらせらるれど、　木「故太閤が(一)御威武に、戰き震ひうち伏しゝ、六十餘州の民草も、　市「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、何時しか靡く世の有樣。　木「いかなればかくまでに、御運傾く西天の、　市「有明の影薄れつゝ、　木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、　市「新日東天に昇るといふ、　木「世の成行の、二人「影なるか。

是非もなき世の有樣と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〲と明けにけり。

――桐一葉――

(一)家康。

(一)歌人、國文學者。御歌所寄人、國學院大學教授。明治六年福井市に生れた。四季の趣味の外、國文學に關する著がある。

(二)古今集卷六、冬歌に見える。

(三)荷田春滿の歌。

(四)古今集卷六、在原元方の歌。

一四 歲暮

鳥野幸次(一)

きのふといひけふと暮して飛鳥川(二)
ながれてはやき月日なりけり

は春道列樹の歌であるが、實にや初春の初子長閑によみそめた暦の紙も數減つて、一年三百六十五日は夢の間。かうなつては嬉しい樂しい追懷よりも、勤むべき道、なすべき業の怠がひし〳〵と身を責めるので、とりわけ學者などにあつては、

見るふみはのこり多くも年くれて(三)
わが世ふけゆく窓のともしび

と悔まれるのが常であり、また老人などは、今更ながら寄る年波に心細さもうち添ふので、

あら玉の年のをはりになる每に(四)
雪もわが身もふりまさりつゝ

と詠められもする。

とは言へ、餅つき競ふ家の內、松伐りたてる軒の樣などから、行交ふ人のしげさやら、飾りたてた市店(いちくら)の花々しさやら、見るもの聞くもの、何一つ賑はしからぬものもなく、忙しげならぬものもない世のならはしに伴なうては、たゞうか〳〵と、年の瀨を越えゆく人が多からう。だが、それも實は物に不足のないあたりのこと、

貧乏のぼうが次第に長くなり(一)
ふりまはされぬ年の暮かな

といつた如き境涯や、やりくり算段も盡果てゝ、

分別の底たゝきけり年の暮(二)

と、途方に暮れる身に取つては、此所數日が泣いても喚いても追つつかぬ大修羅場、人樣々な悲劇喜劇に、天道を恨む者さへ少くはな

(一)萬載狂歌集、よみ人知らず。

(二)芭蕉の句。

修羅場

いであらう。

歳暮に、東都では古くから「歳の市」と言つて、廣い街路に露店を出し、新年用の物品を商ふ事があり、古人の

(一)こねかへす道も師走の市のやう

と賑はしたのは、今も變らぬ有樣で、燈火の光天を焦し、賣聲の頗る勇ましい中を、マントやコートに身をぬくめた紳士淑女などの買物に徘徊するのは、誠にふさはしくも、また嬉しい光景である。

暮も愈、最終の一日となつては、誰しも

(二)何事を爲すとも　なしに明けくれて
ことしもけふになりにけるかな

歳晩の街

(一)曾良の句。
(二)堀河院初度百首、源國信の歌。國信は平安時代の歌人。權中納言。天永二年(一一一一)歿、七年(一〇七〇)—？四十三。

の感懐を深うするのだけれども、今更如何ともする事が出來ぬ。唯人はこの歳暮の述懐と、年始に起す覺悟とを忘れぬ樣にするのが、何より肝腎だと思ふ。

さてこの日は、貴賤何れも神棚や佛壇を清め、家内を掃除し、蒸物煮物で勝手は大混雜、

今知れてすりこ木せはし大晦日

は(一)任柳の句であるが、この瀨戸際に、氣紛れな擂粉木もあつたもの。

今日を大歳と言ふのは、(二)五雜俎や(三)代醉編に元日を小歳と言ふに對する名かと(四)歳時記栞草に見え、俗には大晦日とも大三十日とも言ふ。この夜を除夜または除夕と言ふが、除は新を以て舊に易へる義である。兼好法師の徒然草に、

つごもりの夜いたう暗きに、松ども點して、夜半過ぐるまで人の門たゝき走りありきて、何事にかあらんこと〴〵しくのゝしり

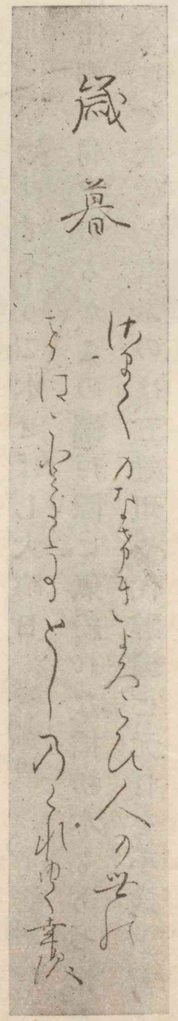
(一)傳未詳
(二)十六卷。明の謝肇淛が撰したもの。
(三)全四十卷。郷邪代醉編。明人張鼎思の著。
(四)俳諧歳時記栞草。五卷。藍亭青藍の著。嘉永四年(二五一一年)出版。

て、足を空にまどふが、曉方よりは流石に音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。

とあるのは、室町時代の樣であり、去來の

年の夜や人に手足の十ばかり

と言つたのは、今も全く同感である。



鳥野幸次筆蹟

漢土では、この夜爆竹を行つて百鬼を驚かし、癘疫を驅る俗があり、我が國では、十二時を合圖に、撞出す寺々の百八の鐘の音、霜夜を流れて哀に寂しく、煩惱消滅の響を刻む程もなく、雞も屢、歌へば、寢つくともなき曉起に、先づ若水の釣瓶をはねて、心の底まで清々しう洗ひ清めて、めでたく元正の天に對ふのを常とする。

歳暮

さま〳〵のなげきよろこび人の世のことはことしにとくれゆく 幸次

爆竹

癘疫

元正

自修文

青年よ偉大なれ

永田秀次郎(一)

私は先年北海道帝國大學の開校五十年の祝賀式に臨み、遙かに旭岳(二)の白雲を仰ぎ、茫々海の如き石狩川(三)の平野を眼前に見渡して、今更の如く大學建設の偉勳者クラーク(四)氏が有名なる訓言を想ひ起した。「ボーイズ・ビー・アンビシャス(五)。」この一語、これを北門の大平原に高唱して、更に一段の意義深きを覺えたのである。

我々日本人は、何としても偉大性に缺ける所がある。何事も纖巧である。小怜悧である。ちよつと先がよく見える。小粒で立廻りの敏捷な力士の樣な者が多い。言換へれば、幕下の手取が多くて、横綱式の人物が少い。私にはこれが不滿足でならない。

私は幼少の時に亡父が口癖の樣に私に言つてゐた言葉を忘れない。「お前は小利口な人間になるなばかでもよいから、大きい

(一)政治家、俳人。東京市長、貴族院議員。青嵐と號する。明治九年兵庫縣に生れた。建國の精神に還れ、高所より觀る、梅白し等の著がある。

(二)上川盆地の東方に聳える北海道最高の火山。海拔二二九〇メートル。

(三)石狩嶽に發し、石狩平野を貫流し、空知、札幌兩流を容れ、石狩港に注ぐ。長さ三六五キロメートル。

(四)William Clark. アメリカの陸軍大佐、哲學博士、法學博士。我が國に來り、札幌農學校の設立に助力し、精神教育をなし以て後進を薫陶した。

(五)"Boys be ambitious."

北門の大平原　北方の門戸、即ち北海道の大平原。

纎巧　事の細かでたくみなこと。

幕下　相撲番附で第二段目の位置。幕内に次ぐもの、俗に十兩と呼ぶ。

横綱　しでを垂れた白麻の綱で、行司のつかさ吉田追風から大關中の拔群の力士にまはせるもの。此所ではそれをまとふ力士。

簡約　はぶいて手輕にすること。簡略。

畸形　形の不齊なこと。

人間になればかな人間よりは、小利口な人間の方が身代を潰してしまふものだ。」と言つてゐた。この言葉は何時までも私の腦中を去らない。私はこの言葉を簡約して、「偉大なる愚者」主義と言ふ。

それで私は何時も青年に對して、「青年は宜しく杉並木の如くに生長せよ。盆栽の如くにねぢけるな。」といふのである。杉の苗木は年一年と根を張り枝を出して、ずん／＼と生長するが、少しも奇妙風雅の點がない。盆栽は天然が巧妙に縮寫されてゐる程珍重される。隨つて曲折畸形を免れない。しかしながら將來棟梁の材となるものは、若木の時に平凡に眞直に生長したものでなくてはならぬ。これを名づけて、「偉大なる平凡」と言ふのである。

西洋の諺に、(一)「一錢に利口で十圓にばか。」と言ふのがある。即ち目の先の事には利口であるが、大局の事にはばかであると言ふのである。日本で「一文惜しみの百失ひ。」と言ふのに似てゐる。餘り近視眼的に物事を觀察しては却つて失敗する。人生には風波が多

棟梁の材　棟や梁となるべき材木。轉じて人の頭となるべき人材。

(一)"Penny wise and pound foolish."

近視眼的に云云　遠見のきかぬ觀察をして。

(一)Henry IV. 西紀一五八九年即位、一五九八年ナントの敕令を發して敎界の紛亂を鎭めた。(西紀一五五三―一六一〇年)

(二)James I. スチュワート王朝の始祖。王權神授論を唱へて王權の伸張を計り、外交上に失敗し、民望を失ひ、イギリス革命の因をなした。(西紀一五六六―一六二五年)

い。その目先の波一つばかりを見ては失敗する。少くとも波を二つ以上見て置かねばならぬ。二つの波に跨がる船は顚覆しない。二つの波を見るだけの心得のある人は決して失敗せぬ。この考へ方を「二波主義」と言ふ。

嘗て佛王ヘンリー四世が(一)英王ゼームス一世(二)を罵つて、「ゼームス一世は基督(三)教國に於ける最も利口なるばかなり。」と言つた。ゼームス一世の批評としての當否は別問題として、「最も利口なるばか」といふ文字は痛快な皮肉である。即ち小局より見れば利口であつて何でも出來る。しかし、大局から見ればばか者であつて、家を喪ひ身を滅すといふ實例は、世上到る所に發見されるのである。世間では往々、平素僅かばかりの注意をすれば、何の困難も生じないものを、ことさらにうち棄て置いて、さて愈〻せつぱ詰つた間際になつて、刃の上を渡る樣な藝當を演じて、漸くこれを切抜け、却つて得々然としてその才を誇るといふ者がある。凡そ

(三)"The wisest fool of Christendom"
皮肉 骨身にこたへる程鋭利な非難をすること。
せつぱ詰る 窮してし方がなくなる。
得々然 得意なさま。
かりそめに覺えた 何といふ事なしに覺えた。
糊口を凌ぐ からうじて生計を立てる。
(一)一卷。支那齊の孫武の撰した兵法の書。
情勢 ありさま。

天下にこれ程ばかな者はない。故に川柳にも、「藝は身を助ける程の不仕合」と言つて、かりそめに覺えた藝で、糊口を凌ぐといふ境遇となれば、これ程不仕合な事はないのである。

孫子に(一)「善く戰ふ者は勝易きに勝つ。故に善く戰ふ者の勝つや、智名なく勇功なし。」と言ふ文句がある。これは兵法ばかりではない、人間の處世法に於ても最も大切な訓言である。その意味は、戰爭の上手と言はれる人は、豫め周圍の情勢を作つて、極めて容易に勝利を得る樣にこしらへて置く。それであるから、さあ戰爭が始つたとなると、平々凡々にすら〳〵と勝つてしまふ。それ故に、餘りに呆氣なく勝負がついてしまつて、偉い功名談が出來ない。奇妙な計略もなければ、勇敢な武名もないと言ふのである。これを處世法に應用すれば、平素に用心をして用意して勉強してゐれば、何の奇もない間に自然に成功するのである。

私が幼少の時に源平盛衰記を讀んで、源九郞判官義經が大の

(贔屓)
(一)京都府(山城國)愛宕郡にある。京都市の北方約十キロメートル。
(二)今の石川縣(加賀國)能美郡安宅町附近にあつた。文治元年(一一八五年)源賴朝が義經の北國に遁れるのを防ぐ爲に設けた。
勸進帳 僧徒などが俗人に勸めて淨財を寄進させる爲に、その主意を記して寄附を集めるに用ひる帳簿。
(三)今の神奈川縣(相模國)足柄下郡石橋村の西。治承四年(一一八〇年)八月、賴朝は三百騎を率ゐてこの山に陣して大庭景親の三千餘騎と戰

ひいきであつた。義經と言へば、牛若丸と言つた子供の時から、鞍(一)馬山へ登つて天狗相手に劍術の稽古をしたり、五條の橋で辨慶を負したり、一の谷の逆落しとか、屋島の八艘飛とかいつた樣に、目の廻る程活躍した英雄である。それで子供心にも、義經程偉い人間はないと思つてゐた。然るに私は年を取るに隨つて、一つの疑問を懷く樣になつた。それは、これ程偉い義經が、兄の賴朝と不和となつた時に、まるで鼠が猫に出遭つた樣に、戰爭にも何にもならずに唯逃げまはり安宅(二)の關では辨慶が勸進帳を讀んだので漸く關所を出て、奧州へ逃延びたといふ憐な芝居が殘つてゐる。平家に對してあれ程に强い大將が、何故に賴朝に對してはこんなに弱いのであるか。これがどう考へても理解出來ぬ。兄の賴朝と言へば、少しも强いといふ話がない。頭が大きかつたといふだけで、戰爭には全く弱い。(三)石橋山の戰爭では散々にうち負けて、朽木の穴に隱れたといふ程の弱蟲である。この弱蟲に對して、戰

つて大敗した。

(一)藤原宗房の女、平忠盛の後妻、清盛の繼母。

驕慢　おごりたかぶる。

爭の神樣の樣な義經が、一戰にも及ばずして逃げまはると言ふのは到底判斷が出來ない事であると思つた。

しかし段々と考へて行くうちに、自然々々に、義經よりは賴朝の方が偉いといふ事が分つて來た。賴朝の偉いのは、義經の偉いのとは全く樣子が違つてゐる。賴朝が平家に捕はれて、既に打首になる所を、(一)池禪尼の情によつて生きてゐた時に、或者は賴朝に勸めて頭髮を剃つて僧になれと言つた。賴朝は唯沈默して聽いてゐる。或者はまた賴朝に說いて決して僧となるなと言つた。賴朝はこれに對しても唯默つて聽いてゐた。賴朝はかくの如く奥底の知れない深みのある人物である。然るに義經は、天狗相手に劍術を稽古するとか、五條の橋で辨慶を負すとかいつた樣な、薄つぺらな子供だましの人物である。卽ち賴朝は、將に將たるの德を備へてゐるけれども、義經は單に兵に將たるに過ぎない。そして義經は平家を滅した功に誇つて、驕慢の態度を取つた。これ等

あさはか　思慮のとゞかぬこと。考の淺いこと。

段違　數等のへだゝりがあつて及びもつかないこと。

(一)文藝、追憶、修養、講演の四部に分れ、作者の隨筆を集めたもの。昭和六年東京實業之日本社發行。

は全く修養の足らない、あさはかな行動である。兄の賴朝とは全く段違の小人物である。換言すれば、賴朝は一錢にばかで十圓に利口である。小局にばかで大局に利口である。然るに義經は、一錢に利口で十圓にばかである。小局に利口で大局にばかである。卽ち賴朝は偉大なる愚者であつて、義經は貧弱なる賢者である。義經が賴朝に對して手も足も出ないのは、誠に當然の事であつて、少しも不思議はないのである。

小利口な人間はだめだ。ばかでも大きい人間がよい。卽ち小局から見てばかでもよい。大局から見て利口でなくてはならぬ。故に私は今の青年に望む。「青年よ偉大なれ。貧弱なる賢者とならんよりは、偉大なる愚者となれ。」これが私の亡父の教であつて、私の今日までの守本尊である。

――(一)梅白し――

(一)第五十五代文德天皇の第一皇子。小野宮と申す。
(二)在原業平。
(三)今の大阪府(河内國)北河内郡牧野村にあつた。

一五 小野の御室

昔惟喬親王(一)(これたかのみこ)と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、その宮へなんおはしましける。その時、右の馬の頭(二)なりける人を、常にゐておはしましけり。狩は懇にもせで、大和歌にかゝれりけり。今狩する交野(三)(かたの)の渚の院の櫻殊に面白し。その木の下におりゐて、枝を折りてかざしにさして、皆歌詠みけり。馬の頭なりける人の詠める、

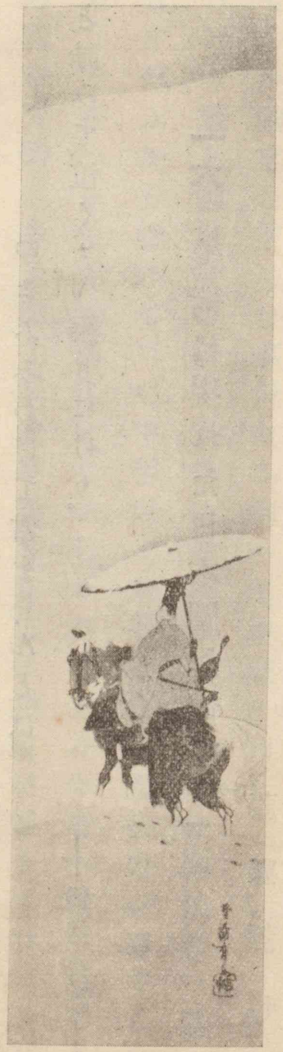
よの中にたえて櫻のなかりせば
　春のこゝろはのどけからまし

また人の歌、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ
　うき世になにか久しかるべき

大殿ごもる
(一)今京都府(山城國)愛宕郡小野鄕村。

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで物語して、さてあるじの皇子入りて、大殿ごもり給ひなんとす。十一日の月も隱れなんとすれば、かの馬の頭の詠める、


小野の雪（谷口香嶠筆）

あかなくにまだきも月のかくるゝか
　山の端にげて入れずもあらなん

かくしつゝ詣で仕うまつりけるを、皇子思の外に御髮(みぐし)おろさせ給ひて、小野(一)といふ所に住み給ひけり。正月(むつき)に拜み奉らんとて詣でたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室(みむろ)に詣で、拜み奉

るに、つれ〴〵といともの悲しくておはしましければ、稍久しくさぶらひて、いにしへの事など思ひ出でて聞えさせけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもありければえさぶらはで、夕暮に歸るとて、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや
ゆきふみわけて君を見んとは

と詠みて、泣く〳〵歸りにけり。

——伊勢物語——

一六　美術に現れた日本國民性　その一

藤懸靜也(一)

(一)美術批評家。國學院大學教授。明治十四年茨城縣に生れた。木版浮世繪大家畫集、浮世繪等の著がある。

美術は一國文明の華の開いたものであつて、一國の文化はその國民性を背景とするに至つて、始めてその光輝を發するものである。過去を顧れば、一國の文化には、その國民性を背景とした大きな

流が明瞭に認められる。

現代に於ては、自身がその社會の渦中にあつて、色々な文化の傾向を見てゐる爲に、いかなる文化が眞にその國民性に適應すべきものか判定に苦しむ事がある。例へば、繪畫に例を取るならば、舊來の日本畫と油繪とに於て、青年は油繪の方が日本の國民性に適すると言ふかも知れないし、中年以上の者は、日本畫の方が適するだらうと考へるかも知れない。しかし、それは人々の考へ樣で、歐米の思想や文物に多く親しんでゐる人々には油繪が好まれ、中年以上で多く日本の物を見てゐる人々には日本畫が好まれるのである。それ故、吾人は趣味の偏した人の說を避けて、日本國民全體の上から、その文化や趣味の傾向を別に考へねばならぬ。それには過去の時代に遡つて、その時々の文化の變遷を見、藝術の變化の跡を尋ねると、美術に現れた日本國民性のいかなるものかをも考察す

る事が出來る。いざ吾人をして、我が日本の古い時代からの繪畫の變遷に就いて一瞥せしめよ。

さて我が國の古代にいかなる藝術をもつてゐたか、遺作が極めて乏しいので、委しい事は分らないが、元來我が國民は風光明媚な山川の風趣に惠まれて、藝術をよく理解し、味はふ力をもつてゐた。それ故、一度優れた大陸藝術に接すると、勃然として藝術の振興を見、自己獨得の長所を發揮するに至つたのである。

我が國に遺存する最古の優秀な藝術品としては、推古時代の物を擧げねばならぬ。これ等の藝術品には、內地で作られた物もあれば、外國から傳來した物もある。しかし、何れにしても、いはゆる六朝(一)式の物で、言ふまでもなく、聖德太子の偉大な力によつて興隆したのである。太子がその當時出來得る限り大陸の文明を吸收して、我が國の文化開發に盡されたのは、我が國の文明と隆運とを開かれ

(一)西紀四二〇年から五八九年までの間に支那で六つの朝廷が興亡した時代に起つた藝術の樣式。

た基である。この時に於ける我が文明の變化は、明治維新の時に際し、歐米文明の影響を受けて變化したよりも、更に著しく大陸文明に化せられた事であらう。大和の法隆寺や其所の寶物を見ると、當時の盛觀がしのばれるのである。

次の奈良時代はいはゆる天平期を最盛の時期とし、建築にも、彫刻にも驚くべき發達を遂げた。これ即ち唐朝の進んだ文明が、直接我が國にはいつたからである。推古時代の美術が一躍して奈良時代の美術になるには、その變化が餘りに大き過ぎるけれども、支那では六朝式から隋(一)の過渡期を經て唐(二)朝式となつたのである。今我が國では六朝式を朝鮮から入れて、次に直接に唐の美術を輸入したので、推古時代と奈良時代との美術に著しい相違を來したのである。唐の文化が入れば、世はまたこの新文明を追うて、すべての建築、調度類から、日常生活の樣子まで唐風になつたであらう。隨つて

(一)六朝の次の時代。西紀五八九年から六一七年まで。

(二)西紀六一八年から九二二年まで。我が推古天皇から醍醐天皇までに當る。

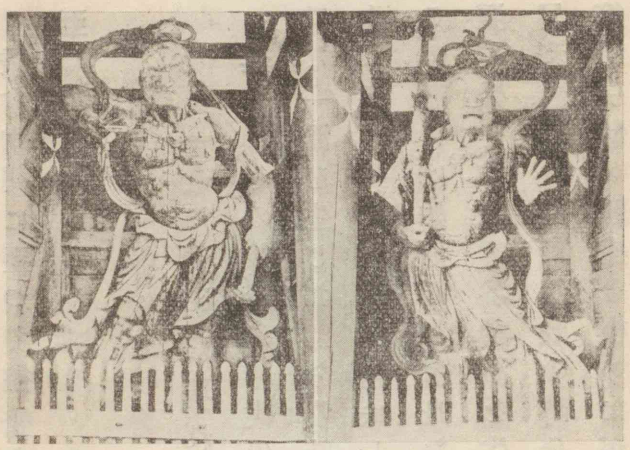
蒙昧

支那思想もまた著しく我が思想界を風靡したに違ない。しかし、斯樣な風潮に乘じたのは、その當時に於ける宮廷及び貴族の一部のみであつた。都會を一歩離れゝば、國民の文化は極めて低い。無智蒙昧な者も多かつたであらう。しかし、この唐朝文化の影響によつて、我が文化の根柢は益〻堅くなつた。

平安時代の初期は倘唐の影響を受けてゐたが、その中期から、日本國民としての自覺を喚び起し、外國文明から離れて、我が國の特色ある文明をなすに至つた。これ實に我が文化の尊い所以である。その頃から國文學が起つて、漢文學に對立する樣になり、藝術に於ても、支那には見る事の出來ない特殊な流風が起つて、更に鎌倉時代にこれを完成した。して見ると、我が日本文化の基礎は、早く古代からあつたのであるが、推古及び奈良時代に外國の影響を受け、それを純日本化して、我が國獨得の精華を發揮したのは、平安及び鎌

(一)有名な佛師。一條天皇から後一條天皇頃（一六四七―一六九六年）の人。

倉時代である。



東大寺南大門の二王像

平安時代は宮廷及び搢紳たちの文化であつたが、鎌倉時代には更にその範圍が廣まつて普遍的性質を帶び、國民的藝術の發達に向つた。彫刻に就いて言へば、天平時代はその精を極め能を盡してゐるが、これ實に唐朝彫刻の模倣である。然るに平安時代の終に定朝(一)が出で、鎌倉時代には運慶、湛慶が出て、木彫界に一大進展をなし、茲に純日本彫刻が出現した。またこれを繪畫の方で考へれば、早く佛畫は精妙な域に達してゐたけれども、平安時代に國文學

(一)畫僧。西海の人。足利義滿頃(二〇二八—二〇五四年)の人。
(二)畫僧。近江の人。如拙の門人。應永、永享頃(二〇五四—二一〇〇年)の人。
(三)畫僧。名は等揚。備中の人。永正三年(二一六六年)歿、年八十七。
(四)明應頃(二一五二—二一六〇年)狩野正信に始り、その子元信は絶世の大家と稱せられた。
(五)曾我蛇足(應仁、二一二七—二一二八年中の人)を祖とする。

の發達に關聯して、純鑑賞的の繪畫が現れた。この流は、平安の末から鎌倉初期に至つて益〻榮え、遂にいはゆる大和繪の一體をなすに至つた。

一七 美術に現れた日本國民性 その二

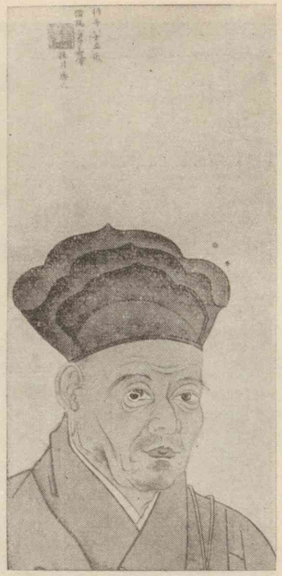
然るにその後鎌倉時代の末から足利時代へかけて、藝術界に特殊な一派を生じた。卽ち當時の新派で、支那からはいつて來た宋元水墨畫の一體で、禪宗趣味と關聯して、我が藝術に一新樣を劃した。この派には如拙(一)周文(二)雪舟(三)などの大家が出てその根柢を作り、狩野(四)派が榮え、曾我(五)雲谷諸派を生じ、舊來の大和繪は全く勢力を失つた。足利義滿から同義政の時代は、この流派の最も盛んな時で、水墨滅筆の一體が旺盛を極めたが、これまた當時の貴族たる武家の趣味から盛んになつたのである。

下剋上

徒手空拳

(一)織田信長及び豐臣秀吉の時代。前者は信長の據城近江國(滋賀縣)蒲生郡安土城により、後者は秀吉の據城山城國(京都府)伏見の桃山城によつて稱せられる。

然るに世は戰國時代となり、舊來の貴族が下々の者から滅され、いはゆる下剋上で、茲に日本の社會に一大變革を來した。卽ち尾張の一農民が關白太政大臣となつて、一躍人臣の榮位を極めたのを始めとして、英雄豪傑は徒手空拳で一國一城の主となつた。これ等の人は天眞爛漫の趣味を發揮して、舊來の如き禪味を帶びた藝術では滿足すべくもない。しかもこれ等の人々は支那の學問がなく、支那趣味を解しないから、俗眼を奪ふ樣な華麗を極めた物でなければ喜ばない。是に於てか極彩色の花鳥動物などが描かれ、また當時の社會狀態を描いた新しい風俗畫が起つた。



雪舟自畫像

されば安土桃山時代(一)は僅かに三十年間に過ぎなかつたけれど

も、近世藝術の基礎を置いた時期であるから、頗る重要な時代と言はなければならぬ。しかもこの時代は、日本の文藝復興の時期とも稱する事の出來る時で、徳川時代の文化の基をなすものである。

徳川三百年間は、泰平の餘澤で文學藝術は鬱然として興り、益〻日本趣味を發展させた。そして繪畫は殊に隆盛で、幾種もの流派を生じ、藝術の燦爛たる花の時期となり、我が日本藝術の盛んな時代を現出した。

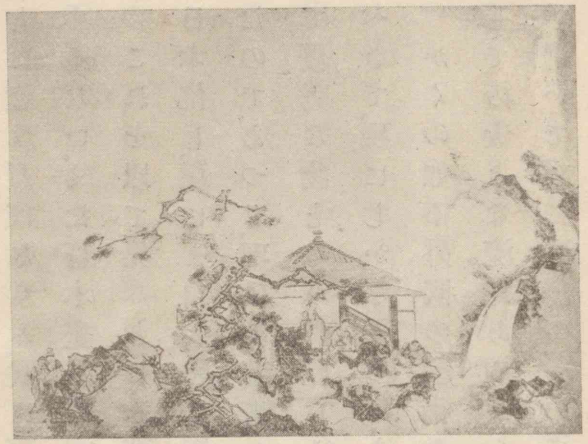
月下鳴機（渡邊華山筆）

光悅に始り、宗達、光琳[一]を經て抱一[二]に至る一派の如きは、その範を大和繪に取り、更にこれを醇化したものである。また近世初期の風俗畫の一體の如きも、やはり範を鎌倉時代の繪卷物に取つてゐる。

（一）尾形光琳。蒔繪師で畫を善くした。京都の人。享保元年（二三七六年）歿、年五十九とも七十六ともいふ。

（二）酒井抱一。俗名は忠因、出家して文詮といふ。姫路城主酒井忠仰の二男、諸派を學び、後一變して光琳風を描いた。文政十一年（二四八八年）歿、年六十八。

江戸趣味の上に作られた浮世繪版畫は、平民の藝術として頗る榮えた。その他圓山[一]四條[二]の諸派も、徳川時代に於ける特殊な畫風である。僅かに長崎からはいつて來た西洋の畫風は餘り行はれず、支那の南宗畫は文人の間に行はれた。しかし、徳川時代は實に日本藝術の燦として華麗な花の開いた時である。


曝亭雅會（狩野探幽筆）

明治になつて西洋藝術の影響を受け、茲に日本藝術の上に一大變革を來した。日本藝術は過去に長い歴史をもつてゐるので、一時は外來の作風に傾いても、暫くして日本的趣味に復つた。現代は各個人の考に依つて、思ひ〳〵の藝術をな

（一）圓山應擧に始つた日本畫の一派。寫生を主とした。

（二）寛政（二四四九―二四六〇年）の頃松村吳春（月溪）に始つた日本畫の一派。

してゐる。舊來の日本畫も新來の油畫も共に榮えてゐるが、油畫も、日本に於て描かれる以上は、日本の特色を發揮すべきで、外國の物とは違はねばならぬ。實に現代に於ては、日本的趣味に傾いた物が少くない。また日本畫も舊來の物とは違つて、面目を一新した。

　これを以て見ると、日本藝術は常に大陸藝術の影響を受けては日本化し、更にまた大陸の影響を受けては日本化して進歩發達したのであつて、現代の藝術もまた外國藝術を更に日本化するに於て優秀な物となり、外國にも見る事の出來ない特殊な藝術となるべきで、現にしかなりつゝあるのである。

　かくの如く外國の藝術を日本化するのは、卽ち國民性を背景としての大きな流があるからである。その文明は日本人の祖先以來承繼いで來た獨得のもので、不知不識の間に日本人の趣味性格の上に大なる影響を與へてゐる。古代よりの日本文化を觀察すると、

この大きな流が藝術の上に驚くべき力をもつてゐる事が明らかに認められる。しかし、藝術趣味はそれ〴〵人によつて異なるものであるから、各その好に從つて藝術を賞鑑し製作すべきであつて、かくてこそ相異なる幾多の流風を生じ、茲に始めてその國の藝術は榮えるに至るのである。しかもよく一國の藝術として誇り得る物は、外國藝術の模倣ではなくて、その國民の文化を背景とし、國民性によつて作られた作物でなければならぬ。

　これを要するに、一國の藝術は、その國民の藝術思想を表したもので、言換へれば、國民性の表れである。國民性はその國民の文化の程度によつて種々な相違を來すであらうが、またその國土の如何によつて、國民性の上にも大きな相違を生ずるであらう。實に國民性が國土の恩惠に支配される事は、蓋し少くない事であらうし、藝術もまた國土の恩惠に浴する事は、蓋し莫大であらう。藝術上に於

ける自然摸倣は頗る重要視されるが、自然摸倣の上には、國土の恩惠を最も考慮すべきである。

國土が一國文化の上に及す力が偉大であつて、國民性もその支配を受け、藝術もまた國土の恩惠に浴すとすれば、推古や奈良や足利の時代に外國藝術の影響を受けて、その內容や形式の上に大きな變化を受けても、若干の時を過ぎれば、その國土固有の特色に復るのは疑のない所で、以上述べた事實がよくこれを證明してゐる。たとひ外國文化の影響に依つて、國民性に變化を生じても、決して外國文化その物と同一にはならない。必ずやその國土の力、國民性の力に依つて變化せしめられる。これ藝術がその國々に依つて異なり、時を異にすればまたその藝術にも大なる相違を來す所以である。そしてその間に動かすべからざる脈絡をもつのは、卽ち國土の力と、その中に働いてゐる國民性の力とに依るのである。

蓬萊の松に
たてはやそ
根のまつ
其角

一八　揚雲雀

ぬれ緣やなづなこぼるゝ土ながら　嵐雪
鶯の身をさかさまに初音かな　其角
なにごとぞ花見る人のなが刀　去來

其角筆蹟

世の中は三日見ぬ間に櫻かな　蓼太
雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉
春の海ひねもすのたり〱かな　蕪村
けろりくわんとして烏と柳かな　一茶
長持に春かくれゆく衣がへ　西鶴

シテ　辨慶
子方　義經
ツレ　同行山伏
狂言　强力
ワキ　富樫
狂言　富樫の從者

(一)石川縣（加賀國）石川郡の地名。石川某は富樫左衞門泰家。
(二)義盛。
(三)清重。
(四)八郞弘常。
(五)十郞兼房。
(六)海尊。

一九　安宅　その一

ワキ詞「かやうに候者は、加賀の國富樫(一)の何某にて候。さても頼朝、義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作り山伏となつて、奥へ御下向の由頼朝聞し召し及ばれ、國々に新關を立てて、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間、この所をば某承つて、山伏を留め申し候。今日(こんにち)も固く申しつけばやと存じ候。いかに誰かある。

狂言詞「御前に候。　ワキ「今日も山伏の御通りあらば、此方へ申し候へ。

狂言「畏まつて候。

ツレ次第「旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん。　サシ「鴻門楯破れ、都の外の旅衣、日も遙々の越路の末、思ひやるこそ遙かなれ。　シテ「さて御供の人々には、　ツレ「伊勢の三郎(二)、駿河の二郎(三)、片岡(四)、増尾(五)、常陸坊(六)、　シテ「辨慶は先達の姿となりて、　ツレ「主從以上十二人、未だ習はぬ旅

(一)文治三年。
(二)「山かくす春の霞ぞ恨めしきいづれ都の境なるらん」（古今集、おと）
(三)滋賀縣高島郡。
(四)「矢田の野に淺茅色づく有乳山峰の淡雪寒くぞあるらし」（新古今集、人丸）
(五)敦賀灣のこと。
(六)福井縣（越前國）敦賀郡と南條郡との境にある。今は木芽峠といふ。
(七)近江と越前との國境。
(八)福井縣（越前國）足羽郡。
(九)同坂井郡、
(一〇)石川縣（加賀國）江沼郡。

姿、袖の篠懸露霜を、今日分けそめて何時までの、限りもいさや白雪の、越路の春に急ぐなり。　上歌「時しも頃は二月(一)の十日の夜、月の都を立出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、(二)山隱す霞ぞ春は恨めしき。　下歌「浪路(四)遙かに行く舟の、海津(三)の浦に著きにけり。東雲早く明けゆけば、淺茅色づく有乳(あらち)山、　上歌「氣比(けひ)(五)の海、宮居久しき神垣や、松の木芽山(六)、なほ行く前に見えたるは、杣山(一〇)人の(七)板取、河瀬の水の淺洲津(あさうづ)(八)や、末は三國(九)の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に著きにけり。

シテ詞「御急ぎ候程に、これははや安宅の湊に御著きにて候。暫くこの所に御休みあらうずるにて候。　子方詞「いかに辨慶。　シテ「御前に候。　子方「只今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。　シテ「いや、何とも承らず候。　子方「安宅の湊に新關を立てて、山伏を固く選むとこそ申しつれ。　シテ「言語道斷の御事にて候ものかな。さては御下向を存

じて立てたる關と存じ候。これはゆゝしき御大事にて候。先づこのかたはらにて暫く御談合あらうずるにて候。これは一大事の御事にて候間、皆々心中の通りを御意見御申しあらうずるにて候。ツレ「我等が心中には、何程の事の候べき、唯打破つて御通りあれかしと存じ候。シテ「暫く。仰の如く、この關一所打破つて御通りあらうずるは、易き事にて候へども、御出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ともして無異の儀が然るべからうずると存じ候。子方「ともかくも辨慶計らひ候へ。シテ「畏まつて候。某きつと案じ出したる事の候。我等を始めて、皆々につくい山伏にて候が、何と申しても御姿隠れ御座なく候間、このまゝにては如何と存じ候。恐多き申し事にて候へども、御篠懸を除(の)けられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深々と召され、いかにもくたびれたる御體(おんてい)にて、我等より後に引下つて御通り候はば、なか〳〵人は思ひも寄り申すまじ

きと存じ候。子方「げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取候へ。シテ「畏まつて候。いかに強力。狂言「御前に候。シテ「笈を持ちて來り候へ。狂言「畏まつて候。シテ「汝が笈を御肩に置かるゝ事は、なんぼう冥加もなき事にてはなきか。先づ汝は先へ行き、關の樣體を見て、誠に山伏を選むか、またさ樣にもなきか、懇に見て來り候へ。狂言「しか〴〵。シテ「さらば御立ちあらうずるにて候。謠「げにや紅は園生に植ゑても隠なし。ツレ謠「强力にはよも目をかけじと、御篠懸を脱替へて、麻の衣を御身に纏ひ、シテ謠「あの强力が負ひたる笈を、子方謠「義經取つて肩に懸け、ツレ「笈の上には雨皮(あまがは)、肩箱取附けて、子方「綾菅笠にて顔を隠し、ツレ「金剛杖にすがり、子方「足痛げなる强力にて、地「よろよろとして歩み給ふ御有樣ぞいたはしき。シテ詞「我等より後に引下つて御出であらうずるにて候。さらば皆々御通り候へ。ツレ詞「承り候。狂言詞「いかに申し候。山伏たちの大勢御通り候。ワキ詞「何と、山伏の

御通りあると申すか。心得てある。なう〳〵客僧たち、これは關にて

安宅の能狂言（その一）

候。シテ「承り候。これは南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣され候。北陸道をばこの客僧承つて罷り通り候。先づ勧に御入り候へ。ワキ「近頃殊勝に候。勧には參らうずるにて候。さりながら、これは山伏たちに限つてとめ申す關にて候。シテ「さてそのいはれは候。ワキ「さん候。頼朝、義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ、十二人の作り山伏となつて御下向の由、その聞え候間、國々に新關を立てて、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間この所をば某承つて、山伏をとめ申し候。殊にこれは大勢御座候間、一人も通し申すまじく候。シテ「委細

承り候。それは作り山伏をこそとめよと仰せ出され候ひつらめ、よも眞の山伏をとめよとは仰せられ候まじ。狂言「いや、昨日も山伏を三人まで斬つたる上は。シテ「さてその斬つたる山伏は判官殿か。ワキ「あらむづかしや問答は無益。一人も通し申すまじい上は候。シテ「さては我等をもこれにて誅せられ候はんずるな。ワキ「なか〳〵の事。シテ「言語道斷。かゝる不祥なる所へ來懸つて候ものかな。この上は力及ばぬ事。さらば最期の勤を始めて、尋常に誅せられうずるにて候。皆々近うわたり候へ。ツレ「承り候。

二〇　安宅　その二

シテ謠「いで〳〵最期の勤を始めん。それ山伏といつは、役の優婆塞の行儀を受け、ツレ謠「その身は不動明王の尊容をかたどり、シテ「頭巾といつは、五智の寶冠なり。ツレ「十二因緣のひだをすゑて戴き、

シテ「九會曼荼羅の柿の篠懸、ツレ「胎藏黑色の脛巾をはき、シテ「さてまた八目の草鞋は、ツレ「八葉の蓮華を踏まへたり。シテ「出で入る息に阿吽の二字を稱へ、ツレ「卽身卽佛の山伏を、シテ「此所にて討ちとめ給はん事、ツレ「明王の照覽計り難う、シテ「熊野權現の御罰の當らん事、ツレ「立所において、シテ「疑あるべからず。地「唵阿毘羅吽欠と、珠數さら〳〵と押揉めば、ワキ詞「近頃殊勝に候。先に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰せ候間、定めて勸進帳の御座なき事は候まじ。勸進帳をあそばされ候へ。これにて聽聞申さうずるにて候。シテ「何と、勸進帳を讀めと候や。ワキ「なか〳〵の事。シテ「心得申して候。シテ詞「もとより勸進帳はあらばこそ、笈の中より往來の、卷物一卷取出し、勸進帳と名附けつゝ、謠「高らかにこそ讀上げけれ。『それつらつら惟れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隱れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。茲に中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝(一)と

安宅の能狂言(その二)

名附け奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみ難く、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く思を、善途に飜して、盧舍那佛を建立す。かほどの靈場の絕えなん事を悲しみて、俊乘坊重源、諸國を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、この世にては無比の樂に誇り、當來にては數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首、敬つて白す。』と、天も響けと讀上げたり。ワキ謠「關の人々肝を消し、地「恐をなして通しけり。ワキ詞「急いで御通り候へ。シテ詞「承り候。狂言詞「いかに申し上げ候。判官殿の御通り候。ワキ謠「いかにこれなる强力とまれとこそ。ツレ謠「すは我が君を怪しむるは、一期の浮沈極りぬと、皆一同に立歸る。シテ詞「あゝ暫く、あわてゝ事をし損ずな。やあ何とてあの强力は通

落居の間

めだれ顔

らぬぞ。ワキ詞「あれは此方よりとめて候。シテ「それは何とて御とめ候ぞ。ワキ「あの强力がちと人に似たると申す者の候程に、さてとめて候よ。シテ「何と、人が人に似たるとは、珍しからぬ仰にて候。さて誰に似て候ぞ。ワキ「判官殿に似たると申す者の候程に、落居の間とめて候。シテ「や、言語道斷。判官殿に似申したる强力めは、一期の思出な。腹立ちや、日高くは能登の國まで指さうずると思ひつるに、僅かの笈負うて後にさがればこそ人も怪しむれ。總じてこの程につくし憎しと思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつ取つて、さん〴〵に打擲す。通れとこそ。や、笈に目をかけ給ふは、謠「盜人ざふな。ツレ謠「方々は何故に、かほど賤しき强力に、太刀刀を拔き給ふは。めだれ顔のふるまひは、臆病の至かと、十一人の山伏は、打刀拔きかけて、勇みかゝれる有樣は、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。ワキ詞「近頃誤りて候。はや〳〵御通り候へ。

凡慮

シテ詞「先の關をば早拔群に程隔りて候間、この所に暫く御休あらうずるにて候。皆々近う御參り候へ。いかに申し上げ候。さても只今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議の働を仕り候事、謠「これと申すに、君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、愈、あさましうこそ候へ。子方詞「さては惡しくも心得ぬと存ず。いかに辨慶、さても只今の機轉、更に凡慮よりなす業にあらず。唯天の御加護とこそ思へ。謠「關の者ども我を怪しめ、生涯限りありつる所に、とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、さんざんに打つて我を助くる、これ辨慶が謀にあらず、八幡の地「御託宣かと思へば、忝くぞ覺ゆる。クリ「それ世は末世に及ぶと雖も、日月は未だ地に落ち給はず。たとひいかなる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬ事やあるべき。子方サシ「げにや現在の果を見て、過去未來を知ると言ふ事、地「今に知られて身の上に、憂き年月のき

さらぎや、下の十日の今日の難を、遁れつるこそ不思議なれ。子方「唯さながらに十餘人、地「夢の覺めたる心地して、互に面を合せつゝ、泣くばかりなる有樣かな。クセ「然るに義經、弓馬の家に生れ來て、命を賴朝に奉り、屍を西海の浪に沈め、山野海岸に起き臥し明す武士の、鎧の袖枕、片敷く隙も波の上、或時は舟に浮み、風波に身を任せ、或時は山脊の、馬蹄も見えぬ雪の內に、海少しある夕波の、立ち來る音や須磨明石の、とかく三年の程もなく、敵を亡し靡く世の、その忠勤も徒に、成果つるこの身の、そも何と言へる因果ぞや。子方謠「げにや思ふ事、かなはねばこそ憂世なれと、地「知れども流石なほ、思ひ返せば梓弓の、すぐなる人は苦しみて、讒臣はいやましに世にありて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや。恨めしの憂世や、あら怨めしの憂世や。

聊爾

(一)比叡山には東塔、西塔、横川とて塔三つあり、辨慶はその西塔に住んで居つた。

ワキ詞「いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキ「さても山伏たちに聊爾を申して、餘りに面目もなく候程に、追つつき申し、酒を一つ參らせうずるにてあるぞ。汝は先へ行きてとめ申し候へ。狂言「畏まつて候。いかに申し候。さきには聊爾を申して、餘りに面目もなく候とて、關守のこれまで酒を持たせて參られて候。シテ詞「言語道斷の事。やがて御目に懸らうずるにて候。狂言「しか〳〵。

シテ詞「げに〳〵これも心得たり。人の情の杯に、受けて心を取らんとや。これにつきて、なほ〳〵人に、謠「心なくれそ吳織、地「怪しめらるな面々と、辨慶に諫められて、この山陰の一宿に、さらりと圓居して、所も山路の菊の酒を飮まうよ。シテ謠「面白や山水に、地「杯を浮めては、流に引かるゝ曲水の、手先づ遮る袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。もとより辨慶は、(一)三塔の遊僧、舞延年の時の和歌。これなる山水の、落ちて巖に響くこそ、地「鳴るは瀧の水。

シテ詞「たべ酔ひて候程に、先達御酌に參らうずるにて候。ワキ詞「さらばたべ候べし。とてもの事に、先達一さし御舞ひ候へ。地謠「鳴るは瀧の水。シテ「鳴るは瀧の水。地「日は照るとも、絶えずとうたり。絶えずとうたり。ワカ「とく／＼立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々暇申してさらばよとて、笈をおつ取り肩にうち懸け、虎の尾を履み毒蛇の口を、遁れたる心地して、陸奥國へと下りけり。

二一　汝の一日を全うせよ　加藤咄堂[一]

「汝の一日を全うせよ。」

一日はこれ永遠の一部分にして、汝が一生に再び逢ひ難き一日なり。生涯はこれ一日の結果、永遠なる宇宙もまたこの一日の連鎖に成る。この一日を缺きては宇宙はその永久性を失ひ、汝の一生もまたその爲に中斷せらる。一日の生命、これ不朽の生命。一日の行爲、これ生涯の行爲。生涯の計を立つる者はこの一日に始め、永遠の生を全うせんとする者は、この一日を忽諸に附すべからず。

〇

修養の奥義は他なし。この蜉蝣に似たる須臾の生のうちに永久性を認め、この等閑に附し易き日常の些事のうちに普遍性を認むるにあり。普遍性を認むるが故に些事終に些事ならず。永久性を認むるが故に須臾終に須臾ならず。一句乾坤を定め、一言天下の法となる古聖先賢の教示、炳として日星の如く萬古に輝く所以のものは、一句に永久性あり、一言に普遍性あるが故にあらずや。英傑不朽の名を成し、俊豪萬人の心を攬る。皆この永久と普遍との兩性に立脚して、時間的には千古の人心に觸れ、空間的には天下萬民と共鳴するものあるが故にあらずや。

〇

[一] 社會教育家、評論家。東洋大學教授。名は熊一郎。明治三年京都府に生れた。都修養論、死生問題、日本風俗史等の著がある。

忽諸に附す

乾坤

炳として日星の如し

過去は悠遠にして追ふべからず。未來は永劫にして測り易からず。唯この一日、朝より暮に至る、目前の事實なり。この一日を全くする、何の難き事かあらん。唯この一日なり。唯この一日、汝の生涯を貫きて永遠の生命に觸る。一日また一日、これを除きて汝の生なく、汝の事なし。一日の全きは生涯の全きなり。一事を疎にせざるは、これ萬事を疎にせざるの本たり。

○

我等の生は永久に懸り、我等の事は普遍に通ず。悠遠の祖先より傳へ〳〵て終に我が父母となり、父母によつて我を生じ、我また子孫を遺して次第に繼承せしむ。我が生は悠遠なる過去の結果にして、永劫なる未來の原因なり。更に廣く言へば、現代の我が生活は過去幾萬年に於ける先人努力の恩惠にして、範を未來幾萬年に遺すものなり。我今日、果して過去の恩惠に對して何の酬ゆる所ありしか。我今日、果して未來に向つて何の遺す所ありしか。一日この考量を缺かずんば、一日その生を等閑に附せざるべく、一日この事を全くせば、一日また無用の人たらじ。よし何の酬ゆる所なく、何の遺す所なくとも酬いんとする心を失はず、遺さんとする努力に怠なき所に、我がこの一日の生存を永久に意義あらしむる事を得べし。

考量

怒火心頭に起る

宿債

○

唯この一日、汝の心を制するに何の難き事かあらん。怒火心頭に起るも、唯この一日を忍べば、胸を焦すの焰も次第に消え行くを覺え、小止みなき慾望も、唯この一日を抑損せば、その勢の薄れ行くを見ん。唯この一日、汝が修養の工夫實に玆にあり。

○

その日の事をしてその日に終らしめよ。さらば我等の生涯はその日その日に解決して累を明日に遺すなく、宿債の我が將來を苦

しむるなからん。我等の日常生活を煩瑣ならしめ、我等の一日を複雜ならしむるは、過去未解決の問題今日に積集し、今日これを決するに苦しみてこれを來日に讓る、來日またこれを苦しみてこれを次日に讓るに因る。讓る每に問題は倍加し、終に獨力を以て如何ともすべからざるに至る。勿論世には一日を以て決し難き件あり。人には數日、數月、數年の準備を要する事あり。一切の事件を一日に決するは難けれども、これ等の諸問題を整理して著手の方針を定め、一日每に著々步を進むる、何の難きかあらん。一時に巨額の金を貯へんは難けれども、その方針を定めて一日また一日と少額を貯へ、幾年の後にその額に達せしむるの難からざるが如く、百年の計を一日に決せんとするは難けれども、一日々々これに向へば、百年の計を百年に決するもの、また何の難きかあらん。

○

徒に明日の事を苦慮して今日の計を疎略にするは、痴人の過慮にして、妄りに今日に執著して明日の計を忘るゝは、愚人の淺見。今日の事は今日にして足れり。されどその今日は前日の結果たると共に、明日の原因たるを知らざるべからず。

○

この一日を中心として悠遠の過去を見よ。この一日を中心として永劫の未來を察せよ。三世通觀の明は、この一日の頂點に立つて過去と未來とを下瞰するにあり。過去を見るが故に現在の苦痛をその結果として諦むべく、未來を見るが故に苦中尙希望の微笑あり。我が生をして因果一貫せしめんとす、またこの

「汝の一日を全うせよ。」

の箴言を忘れざるにあり。

―啓發錄―

（一）歷史家、評論家。名は猪一郞。文久三年（一五二三年）肥後に生れた。國民叢書、靜思餘錄、蘇峯文選、近世國民史等の著がある。
（二）論語にある。自分の身を犧牲として仁の行爲をする意。
一旦緩急的　急な事變が起る樣な。異常な。
尋常一樣　普通一般。
著衣喫飯的　著物を著、飯を食ふといつた樣に極くありふれた樣な。
小笠原流　武家禮式の一派で、傳統古く、武家禮式の本宗として、幕府及び諸侯

自修文

平凡の道徳

徳富蘇峰（一）

日常我々に取つて缺くべからざる、卽ち我々の生活と終始相伴なふ大切の一は、平凡の道徳である。平凡の道徳とは、身（二）を殺して仁をなすとか、國家の爲に一命を擲つとか、いはゆる一旦緩急的の事ではなく、尋常一樣、著衣喫飯的の事である。これはその事が餘りに平凡であるが爲に、往々世の中の人がその大切な事を見逃し、見逃すが爲に隨つて注意を拂はず、注意を拂はぬ爲に我我の生活の上に大なる不愉快、不都合を來す場合が少くない。

平凡の道徳を一口に言へば、先づ行儀作法であらう。行儀作法と言ふと、何やら小笠原流の禮式とか、また外交官流儀の儀禮とか、種々面倒の樣に思ふ者もあらうが、我々の言ふ行儀作法は、いはゆる平凡の道徳であつて、その日〳〵我々が家庭人として、若しくは社會人として、互に生活するその方式の一部、若しくは一

皆これに遵由した。足利義滿の時小笠原長秀の定めたもの。
社會人　社會に住み、その社會に適應した生活をする人。
方式　一定の形式。かた。
倫理　人生の道義。道德。
教養　をしへそだてること。
定義　一つの概念の意味を適確に且明晰に敍述すること。
滔々皆是　多勢の者皆これである。

小部分に外ならない。

我が國では、倫理、修身などの問題は、小學、中學に於ては何れも重大なる課目として取りあつかはれてゐる。しかしながら、行儀作法などに就いては、今日では家庭でも、學校でも、餘りその教養を等閑にするものと見えて、我々が見廻す世間には、紳士もあり、淑女もあり、いはゆる文明人も多い樣だが、しかもその人々の行儀作法に就いては、甚だ感服し難い所のものが多い樣に思はれる。一體紳士の定義は、己の便宜を犧牲として他人の便宜を支持する者と言ふが、それ程でなくとも、己の便宜と同時に他人の便宜も考慮すべきが、紳士淑女と言ふべき者の本分であらう。否、社會人としては、誰しもかくあるべきものであらう。然るに今日の世の中には、己の便宜を支持する者は滔々皆是であるが、他人の便宜を考慮する者はない。全くないでもあるまいが、甚だ少い樣に思はれる。

寄席　落語、講釋、音曲その他演藝を興行する所。
狸寢入　そられいり。
横領　不法に奪ふこと。よこどり。
駄辯を弄する　むだなおしやべりをする。

それ故路を歩いても、電車に乗つても、汽車に乗つても、宿屋に泊つても、その他、寄席や活動や芝居に行つても、苟も人と人と相接する所では、常に痛切にそれが感ぜられる。例へば、人ごみの電車中で一人で二人前、二人で三人前の席を占めた所で、別段より多く己に便宜があるでもなく、一人で一人前の座席を占め、二人で二人前の座席を占めたとて、別段己に損がいくわけもない。然るに今日では、任意に自らその席を譲るなどと言ふ事は極めて稀有で、當前の事、卽ちその腰が五寸か一尺傍へ寄る程度の事をする者すらも甚だ少い樣だ。汽車などでは、偶、後から乗りこんだ客が、當惑して座席を探してゐるのに、前の客は狸寢入をして、二人前乃至三四人前も横領して、知らんふりをしてゐる者さへもある。

かうした例は擧げれば數限りもない。とにかく、可なりはしやぐ事の好きであり、可なり駄辯を弄する事の好きであり、可なり

禁句　和歌、俳諧などで忌み避けて使用しない句。こゝは單に嫌つて使用せぬ言葉の意。
不面目　面目なけがすこと。
獻身的精神　自己の利害を顧ずに力を盡す樣な精神。
社交心　世の中のつきあひをする上の色々な心がまへ。

社交的であり、可なり快活の風をしながらも、概して言へば、我が國には二つの禁句がある樣に思はれる。それは「御免下さい。」といふ句と、「有難う。」といふ句とである。この二句を口にしたとて、別に恥辱でもなく、不面目でもあるまいが、例へば、人と人との間に割りこんで腰を掛ける際にも、「御免下さい。」といふ言葉はなか／＼吐けない。己が落した切符を隣の人が拾つてくれたとて、默つてこれを受取るばかりで、別に「有難う。」とも言はない。殆ど今日の社會的生活狀態から、「御免下さい。」「有難う。」といふ二つの文句は、取除けられてゐるかの如き趣がある。

要するに、今日は己を損じて人を益するなどといふ獻身的精神は愚か、共榮共存、相互に面白く暮すといふ樣な、極めて平凡な社交心さへも、殆ど見出す事が多くない樣である。

支那の聖人は「洒掃、應對より以て道に達す。」と言つた。洒掃とは掃除をする事、應對とは人と應接する事である。卽ち、言はば身の

眞諦　まことの道。眞理。

追從　へつらふこと。

輕薄　篤實でないこと。

天國に近い社會　神または天使などの住むと言ふ清淨無垢、無憂無苦の天國、さうした狀態に近い世の中。

(一)昭和五年東京民友社發行。

廻り、家の廻りをきちんと取片附け、日常交際する人にそれ〴〵の行儀作法を盡し、それを推して段々登れば、立派な人格が出來上るといふ意味である。自分はこれを平凡道德の眞諦と思ふ。先輩に向つて先輩らしく、老人に向つて老人らしく、子供に向つて子供らしく、當前の場合に當前の事をするのは、決して追從でもなく、輕薄でもない。然るに今日では、人々互に相接して、あいさつのし樣さへもろくに出來ない者が多い。筆を執れば堂々たる文章を書く程の者でも、一通りの作法に適する手紙さへ書けない者が世間には少くない。

すべて今日に於て、我が國に最も缺けた一つは、自分の先に述べた平凡道德の修養である。若しこれが各に十二分に行屆いたならば、我が社會は今少し愉快に、今少し快活に、今少し幸福に、今少し天國に近い社會であらうと信ずる。

——景仰(一)と自省——

(一)鎌倉時代の歌人、文學者。京都の人。建保四年（一八七六年）六十四歲で歿したと言はれる。

うたかた

棟を並べいらかを爭ふ

二三　方丈記　その一

鴨(一)長明

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え、且結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

玉敷の都（伊藤龍涯筆）

玉敷の都のうちに棟を並べいらかを爭へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は作り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず人も多かれど、古見し人は、二三十人がうちに僅かに一人二人なり。あしたに死しゆふべに生るゝなら

無常を爭ひ去る

(一)第八十代高倉天皇の御代。(一八三七年)

ひ、唯水の泡にぞ似たりける。

知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。また知らず、假のやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむる。そのあるじと住家と無常を爭ひ去る樣、言はば朝顏の露に異ならず。あるは露落ちて花殘れり。殘ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花は凋みて露尙消えず。消えずと雖もゆふべを待つ事なし。

凡そ物の心を知れりしよりこの方、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、稍たび／＼になりぬ。

二　安元の大火

去にし(一)安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて、靜かならざりし夜、戌の時ばかり都の巽より火出で來て、乾に至る。果には朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來ける

となん。吹迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焔、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心あらんや。あるは煙に咽びて倒れ伏し、あるは焔にまぐれて忽ちに死にぬ。あるはまた纔かに身一つからくして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營皆おろかなるうちに、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を惱ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

三　治承の辻風

(一)高倉天皇の御代。(一八四〇年)

(桁)

業風

(二)福原遷都。

(三)第五十二代。

また治承(一)四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極の程より大きなる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きける事侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、そのうちに籠れる家ども、大きなるも、小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもありけた、柱ばかり殘れるもあり。また門の上を吹放ちて、四五町が程に置き、また垣を吹拂ひて、隣と一つになせり。況や家の内の寶數を盡して空にあがり、檜皮、葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹立てたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りとよむ音に、物言ふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。

四　都うつり

また同じ年の六月の頃、俄に都(二)うつり侍りき。いと思の外なりし事なり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨(三)天皇の御時都と定

(一)高倉天皇。

まりにけるより後、既に數百歳を經たり。ことなる故なくて、たやすく改るべくもあらねば、これを世の人たやすからず憂へあへる樣、ことわりにも過ぎたり。されど、とかく言ふかひなくて、御(一)門より始め奉りて、大臣、公卿悉く移り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰かひとり故郷に殘り居らん。官位に思をかけ、主君の蔭を賴む程の人は、ひと日なりとも疾く移らんとはげみあへり。時を失ひ、世にあまされて期する所なき者は、愁へながら留りゐたり。軒を爭ひし人のすまひ、日を經つゝ荒行く。家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の前に畑となる。人の心皆改りて、唯馬鞍をのみ重くす。牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の莊園をば好まず。

その時おのづから事の便りありて、津の國今の京に至れり。所の有樣を見るに、その地程せばくて、條里を割るに足らず。北は山に沿

木の丸殿
ありとしある人
浮雲の思
都の手ぶり
瑞相

ひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常にかまびすしくて、潮風殊に烈しく、内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なかなかやうかはりて、優なる方も侍りき。日々に壊ちて川もせきあへず運び下す家は、いづくに作れるにかあらん、猶空しき地は多く、作れる屋は少し。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、皆浮雲の思をなせり。もとよりこの所にゐたる者は、地を失ひて憂へ、今移り住む人は、土木のわづらひある事を歎く。路のほとりを見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都の手ぶり忽ちに改りて、たゞひなびたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つゝ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂遂に空しからざりければ、同じ年の冬、猶この京に歸り給ひにき。されど壊ちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにも作らず。

(一)堯帝。
(二)仁德天皇。
(三)第八十一代安德天皇の御代。(一八四一年)
ぞめき

ほのかに傳へ聞くに、古の賢き御代には、憐みをもて國を治め給ふ。卽ち(一)御殿に茅を葺きて、軒をだにとゝのへず、(二)煙の乏しきを見給ふ時は、限りある貢物をさへ免されき。これは民を惠み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中の有樣、昔になぞらへて知りぬべし。

飢饉
(日蓮註畫讚)

五 養和の飢饉

また(三)養和の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間飢渇して、あさましき事侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水などよからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實のらず、空しく春耕し夏植うる營のみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。

なべてならぬ

さのみやはみさをもつくりあへん

あまさへ

これによりて國々の民、あるは地を捨てて境を出で、あるは家を忘れて山に住む。樣々の御祈始りて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても、源は田舍をこそ頼めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやはみさをもつくりあへん、念じわびつゝ、樣々の寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たま〳〵かふる者は金を輕くし、粟を重くす。乞食路のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に滿てり。

さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさる樣に跡形なし。

二三 方丈記 その二

六 わづらひ

すべて世のありにくき事、我が身と住家とのはかなくあだなる

すぼし

念々に動く

樣かくの如し。況や所により身の程に隨ひて心を惱ます事、擧げて數ふべからず。

若しおのづから身數ならずして權門の傍にをる者は、深く悅ぶ事はあれども、大いに樂しぶに能はず。歎ある時も、聲を揚げて泣く事なし。進退安からず、立居につけて恐れ戰く。例へば、雀の鷹の巣に近づけるが如し。若し貧しくして富める家の隣にをる者は、朝夕すぼき姿を恥ぢて、諂ひつゝ出で入る。妻子僮僕の羨める樣を見るにも、富める家の人のないがしろなる氣色を聞くにも、心念々に動きて時として安からず。若しせばき地にをれば、近く炎上する時その害を遁るゝ事なし。若し邊地にあれば、往反煩多く、盜賊の難はなれ難し。勢ある者は貪慾深く、ひとり身なる者は人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人を賴めば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世に從へば身苦し。また從

たまゆら

(一)「住みわびて我さへ軒の忍草しのぶかたがたしげき宿かな」(金葉集、周防内侍)

たづき

(二)順徳天皇の承久(一八七九―一八八一年)の頃。

はねば狂へるに似たり。何れの所を占め、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を慰むべき。

我が身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後縁かけ身衰へて(一)忍ぶ方々しげかりしかば、終に跡とむる事を得ずして、三十餘りにして、更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしすまひになずらふるに、十分が一なり。唯居屋ばかりを構へて、はかばかしくは屋を造るに及ばず。僅かに築地をつけりと雖も、門たつるにたづきなし。竹を柱として車宿りとせり。雪降り風吹く毎に危からずしもあらず。所は河原近ければ水の難深く、白波のおそれも騒がし。

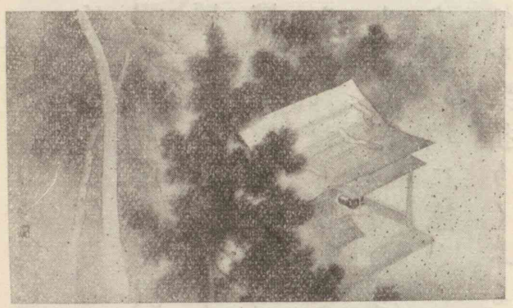
すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心を惱ませる事は、三十餘年なり。その間をり／＼のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち(二)五十の春を迎へて家を出で、世に背けり。もとより妻子なけ

よすが

(一)一名小鹽山。今京都府(山城國)乙訓郡にある。京都市の西南。

(二)慶滋保胤、池亭記。

れば捨難きよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく(一)大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。



幽棲（伊藤龍涯筆）

七　閑居

此所に六十の露消え方に及びて、更に末葉の宿りを結べる事あり。言はば(二)旅人の一夜の宿りを造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に齢は年々に傾き、住家はをり／＼にせばし。その家の有樣世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎にかけがねをかけたり。若し心に適はぬ事あらば、易く外に移さんが爲なり。その改め造

都うつり　伊藤龍涯筆

(一)京都市伏見區醍醐木幡山の東北。

(二)六卷。源信僧都の著。源信は俗姓卜部。大和の人。寛仁元年（一六七七年）寂、年七十六。

ほどろ　つかなみ

る時いくばくの煩かある。積む所僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらず。

今、(一)日野山の奥に跡を隱して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を造り、内には西の垣に沿へて阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。即ち和歌、管絃、(二)往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏、繼琵琶これなり。東に沿へてわらびのほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、此所に文机を出せり。枕の方に炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろ〱の藥草を植ゑたり。假の庵の有様かくの如し。

觀念の便り

その所の樣を言はば、南にかけひあり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山と言ふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念の便りなきにしもあらず。

鴨長明

春は藤浪を見る。紫雲の如くにして、西の方に匂ふ。夏は杜鵑を聞く。語らふ毎に死出の山路を契る。秋はひぐらしの聲耳に滿てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む。積り消ゆる樣罪障に喩へつべし。若し念佛物憂く、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとりをれば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らん。若し跡の白波に身を寄する

（一）京都府（山城國）紀伊郡。宇治川の東岸。
（二）沙彌滿誓。第四十四代元正天皇（一三七五－一三八三年）の御代頃の人。
（三）白樂天の琵琶行に「潯陽江頭夜客を送る、楓葉荻花秋瑟瑟。」とある。
（四）桂大納言源經信。琵琶の名手。嘉保元年（一七五四年）太宰權帥に貶せられた。
（五）（六）共に琵琶の名曲。
あからさま

あしたには、（一）岡の屋に行交ふ船を眺めて、（二）滿沙彌が風情をぬすみ、若し桂の風葉を鳴す夕には、（三）潯陽の江を想ひやりて、（四）源都督のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しば〳〵松の響に（五）秋風の樂をたぐへ、水の音に（六）流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

おほかたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今既に五とせを經たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事の便りに都の樣を聞けば、この山に籠りゐて後、やんごとなき人の隱れ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たび〳〵の炎上に亡びたる家またいくそばくぞ。唯假の庵のみ、のどけくしておそれなし。

がうな

程せばしと雖も夜臥す床あり、晝ゐる座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯にをる。卽ち人を恐るゝが故なり。我またかくの如し。身を知り世を知れゝば、願はず、まじらはず、唯靜かなるを望とし、愁なきを樂しみとす。

それ三界は唯心一つなり。心若し安からずば、牛馬、七珍も由なく、宮殿、樓閣も望なし。今寂しきすまひ一間の庵、自らこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれる事を恥づと雖も、歸りて此所にをる時は、他の俗塵に著する事をあはれぶ。

若し人この言へる事を疑はば、魚鳥の有樣を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとらん。

(一)哲學者、文學博士。東京帝國大學教授。明治八年茨城縣に生れた。國民道德要義、思想と國家等の著がある。

琴線を振はす

全人格

(二)rhythm.

九重の雲上

二四　情操日本と神道

深作安文(一)

我が國では已に神代の昔から、異性間の愛を表すにも、また武將が戰場にあつてその部下を鼓舞するにも、短歌や長歌を用ひたのである。卽ち一種の文學と音樂とによつて、一人の胸裡に湧いて出た感情を他人に傳へ、以てその琴線を振はせたのである。感情は一種の感染性を有してゐる。その一人の心の內面に溢れ出た感情を、殘る所なく他人の心に傳へて、その全人格を動かし、その情緒を高鳴らせ、その人をして己と同じ心境に到らしめるには、調子のあり(二)リズムのある音聲が最も有效である。文字よりも、身振よりも、熾烈な情熱の滿ちた諧音は、人をその心の奧底から動かす上に、はるかに大きな力をもつ。

この樣な趣味性は、今尙日本民族に存して、上は畏くも九重の雲

上を始め奉り、下は山の奧、野の末の同胞に至るまで、明らかに優美な風尙を認める事が出來る。また俳句は世界で最も簡單な詩形であるが、一種獨得の妙味を有し、それが、くは持つ人にも、草刈る人にも弄ばれる事は、餘り他國に類例を見ぬ所である。斯樣な點からすれば、我が日本民族はすべて詩人である。我が日本は詩の國である。情操日本は玆にはつきり窺はれる。

如上の事實はまた、これを我が日本民族の情操生活と呼ぶべきである。この生活が道德化すれば、殆ど理想的の動機主義を成すのである。史前時代の我が遠祖は、「善」を言表すに「きよし」といふ言葉を用ひ、「惡」を言表すに「きたなし」といふ言葉を用ひた。日本書紀の著者は、前者に「淸」「赤」等の漢字をあて、後者に「濁」「黑」等のそれをあてゝゐる。例へば、同書の素戔嗚尊が天祖に向つて誓約(うけひ)をなさる際の敍述に、尊は「吾元より黑心なし。」と對へ奉つたが、その「黑心」を「きたなきこゝ

ろ」と訓ませ、天祖は「若し然らば何を以つて爾が赤心を明さん。」と問はせ給うたが、その「赤心」を「きよきこゝろ」と訓ませてある。尊はこれに向つて、「吾が生めらんこれ女ならば、則ち濁心ありとおぼせ。若しこれ男ならば、則ち清心ありとおぼせ。」と對へ奉つたが、その「濁心」を「きたなきこゝろ」その「清心」を「きよきこゝろ」と訓ませてある。

思ふに「清」は我が國の河水または海水の清く澄みきつてゐる姿の聯想より來り「赤」はあか〳〵と照輝く太陽の光のそれから來り、「濁」は濁水、汚水のそれ、「黑」は暗夜、暗所のそれから來たものの樣に想像される。卽ち割合に素樸な頭腦を以て風光の明媚な國土に住んでゐた我等の祖先は、美的情操と道德的情操とを混化して、「清」「赤」と「善」「濁」「黑」と「惡」とを一致させたものの樣である。

これによつて見れば、我等の遠祖が清淨を愛し汚穢を忌んだ事は、容易にこれを推斷する事が出來る。神道もまた大いに清淨を重

んずる。或はこれを潔白と言ふべきである。これ神は清淨を好み不淨を忌むとされたからである。我が上代に於ては、「穢」と「罪」とは同一視された。「禊」は身體の「穢」を去る所に起り、「祓」は精神のそれを去る所に起り、兩者は何れも神に奉仕する場合の作法の一となつた。死者があれば喪屋を建て、産婦があれば産屋を建て、甚だしきに至つては、死者があれば惜氣もなく家を棄てて他に移る事すらあつた。これを「奧津棄戸」と言ふのである。畏くも神武天皇以後數十代の間、頻りに都を遷し給うた事實も、或はこの習俗と何等か關係があつたかも知れぬ。

以上の清淨または潔白が更に內面化すると、神道の第二の德目が出來るのである。それは正直である。正直は神道に於ては大いに尊ばれ、後には「正直の頭に神宿る。」といふ諺さへ出來た程である。隨つて虛僞は極めて卑しめられた。かの誓約や盟神探湯の慣習は、一

にはこれが爲に生じたのである。前者は他人から無實の疑を受けた時、神に請うて努めて困難な事を爲してその無罪を立證する事であり、後者は眞僞正邪の明らかでない時、神に盟つて手を熱湯中に入れ、その爛れると否とによつて眞僞なり正邪なりを判ずる方法を言ふのである。何れも神人の靈的交通を豫想する。

正直の源は「まごゝろ」である。「まごゝろ」は至純で無雑な心である。詳しくは、心に於て僞なきを、行に於て僞なきを「まこと」と言ふのである。何れも精神的潔白である。我が國では「まごゝろ」を以て神を祀れば神はこれを饗け給ふのである。卽ち「まごゝろ」は我が國に於ける祭祀の動機である。この動機の下に敬神崇祖が成立つのである。蓋し春風に秋雨に、或は亡祖父母をしのび、或は父母を慕ふのは孝子順孫の「まごゝろ」である。特にその忌辰には、この感情が格別に痛切となるのであつて、故人の生前愛好した山海の

産物を靈前に捧げて、一門擧つて追遠の誠を致すのである。その謹んで故人の恩德を謝し、その音容をしのび、その言動を想ひ、その業績を讃ふるに及んでは、各自の敬虔な情操は愈、高調されて、在天の靈、彷彿として來り饗くる感があるのである。孔子のいはゆる「如在」の祭とはこれを言ふのである。由つて見れば、「まごゝろ」は神人交感の契機である。

もと我が國で由緒正しい神の中には、その生前「まごゝろ」を動機として己が身命を君國に捧げた者が少くない。我が國では尊王殉國の「まごゝろ」から發して、その生命を擲つた者は、護國の神と祀られて、年々官祭の儀式が嚴に行はれるのである。故に、我が國に於て人をして神たらしめるものは、一にその「まごゝろ」である。寡聞なる自分は、未だかくまでに徹底した動機主義の他に存するのを聞かぬ。苟くも眞の日本男子たる爲には、心頭一點の陰翳を止めず、神と

淨明を競ひ、神と至誠を爭ふ底の「まごゝろ」に徹せねばならぬ。否眞人たる爲にもまた然りである。

――思想と國家――

帝國實業讀本 卷八 終

昭和七年十一月 一 日印 刷
昭和七年十一月 三 日發 行
昭和八年七月十七日訂正再版印刷
昭和八年七月二十日訂正再版發行

帝國實業讀本

定價
自卷一至卷六 各金六拾錢
自卷七至卷八 各金五拾四錢
自卷九至卷十 各金五拾壹錢

版權所有

H.A 檢 芳賀

編者 芳賀矢一
訂補者 上田萬年
同 長谷川福平

東京市神田區神保町一丁目三番地
發行者兼印刷者 合資會社 冨山房
同所合資會社冨山房社長
代表者 坂本嘉治馬
東京市小石川區音羽町七丁目六番地
印刷所 冨山房印刷部

發行所
東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社 冨山房
電話神田二一七一―二一七八番
振替口座東京五〇一番

野本製

廣商
梶山義春